
葉を挟んだ夏の思い出

NIGHT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

栞を挟んだ夏の思い出

【Nコード】

N7581L

【作者名】

NIGHT

【あらすじ】

主人公の狩野龍二は、いたって普通の学校生活を送っている中学生しかし、ある真実を知らされた龍二は、苦難を乗り越えて人生を決める物語です

真実を知る前（前書き）

今回初めて投稿しました。

小説と言うのを初めて書いたので、読みにくい文章になっているかもしれませんが読んでいただけるとうれしいです

真実を知る前

「……て」

「…起きて」

誰かがオレに呼びかけている気がする…

「?…何だ」

オレは重たいまぶたを力なく開けた

誰だよ起こすのは…

そう思いつつ少しずつ視界を広げていった

目に入った景色は何もないところだった

ただ真っ白な景色があるだけだ

オレの脳はまだ眠ったまままで理解ができなかった

「やっと起きてくれたね」

寝ぼけながらもあたりを見渡すと、そこには誰かが立っているのがわかった

「…あんた誰だ？」

突然現れた人？がオレに呼び掛けていた

何故「人？」かと言うと人の形の姿ではあるがそれ以外はわからないからだ

「…僕が分からないの…?」

こいつは何を言ってるんだ？いきなり現れて分かるわけないだろ
そう思いつつオレは目の前の奴に聞いた

「わかんねーよ 誰なんだ？」

「それにここどこだよ」

「何を言ってるの？ 僕だよ○○○だよ」

その時、突然雑音が聞こえて名前が聞き取れなかった

「悪いもっかい言ってくれ」

「○○○だよ」

またも雑音が聞こえて名前が聞こえなかった

「お前わざと聞こえないようにしてるのか？」

オレは強い口調をしたことは逆に名前が聞き取れないことに何かあせる気持ちが湧きあがってきた

「……そっか君に僕の名前が届いていないんだね」

「でも大丈夫いつか必ずわかるからね」

「いや、意味がわかんねーよ　せめてこの場所を教えろよ」

さっきまで眠気と戦っていたのにいつの間にか脳がフル回転をして状況を整理している

「あせらなくていいよ」

その言葉と同時に視界が真っ暗になった

ミーンミーンミー……

8月24日

いつものように暑苦しい合唱部が鳴きはじめた

「くっっ…」

バサッ！

オレは布団から飛び起きた

「だから何だよこのざつおん……って、あれ？」

視界には見慣れたオレの部屋が映っていた

「なんだ夢か……」

「はーっ…何だったんだよあの夢」

額から流れる汗は暑さだけでなく、油汗も混じっているようだった
オレは汗を拭きながら、ふと目覚まし時計をみると時刻は「7時30分」だった

なんだよ今日は少し早く起きちゃったな

いつもなら40分でも大丈夫だった　そういつもなら…

ミーンミン……

「あーっもう！」

こううるさいと二度寝は無理そうだ……ん？

「何か忘れてる…」

熟睡中の脳よオレに考える力を！

普段は起動まで時間のかかる脳を無理やりたたき起こした

「そうだったっ！！」

大声をあげたせいでセミが慌てて飛んで行った

「今日は特別授業で、しかも日直で早く学校行くんだった！」

あせったオレも慌てて飛んで行った

8時までには学校に入らないといけない

「ヤバイっヤバイっ！」

オレは朝飯を食べずに家を出て真夏の太陽を浴びながら必死に走った

え？ えらく態度がデカイわりには、何で日直ごときで必死になつてるかって？

自分で言うのもあれだが、オレは言葉の発言は悪いが性格は真面目なんだよ

え？ 真面目なのに寝坊したのかって？

……ごめんなさい

「って何独り言、言ってたんだよオレ 暑さでおかしくなったか??」

そんなことを言いつつオレが通う学校の森乃宮学園が見えてきた

学校の名前に森がついているだけあって、周りは森林で覆い尽くされてるため夏でも涼しく感じたり感じなかったり……

「よっしゃギリセーフだ」

学校の時計を見ると7時56分だった

「危ねー…ホントにギリかよ」

荒れた呼吸を整えながら校舎へ入った

「あらゝ？ おはよう今日は早いねゝ それにスゴイ汗じゃない大丈夫？」

昇降口で靴を履き替えていると声が聞こえてきた

「あつ おはようございます中西先生」

この人は英語の中西先生

いつも黒のスーツを着こなして見た目からして英語ができます的な人だ ただ見た目とは裏腹に癖なのか語尾がいつも伸びてる

のんびりした感じだが不快ではないので特に気にはなっていない

「今日は日直なんで早いんですよ」

「そうなの～暑い中御苦労さま～」

「それじゃもう教室に行かないといけなないので失礼します」

「頑張ってね～」

いつもは口悪いオレでもさすがに先生には敬語になっている
急いで階段を上り、オレの教室は2－4クラス 教室は3階にあっ
て結構体力を使う

教室に着き中を見渡すと、すでにもう一人の日直が来ていた

「おーっす辰則たつのり 遅くなって悪い」

そこにいたのは同じクラスの辰則である

外見はガッチリした体育系野郎 オレの友人1号でところだ 運動
部だけあってか全身真っ黒く焼けている

「おいおい龍二りゅうじ、時間ギリギリじゃねーか」

「悪い今日日直なの忘れかけてた(笑)」

笑っている顔に重い拳が当たった

「「忘れかけてた」じゃなくて「ギリ思い出した」だろーが」

「ふっ…さすがは体育会系なかなかの威力じゃないか」

フラフラになりながらも必死で抵抗した

「まあいいあとは頼んだぞ」

「了解です」

ここは敬語でいかねば殺されかねん

「ふーっ綺麗になった」

ボロボロの顔…じゃなくて雑巾で花瓶を拭いたり、黒板を拭いたり、
性格は真面目なだけあって隅々まで綺麗にした

「8時30分」

日直じゃない普段の学生がぞろぞろやってきた

「よしこれぐらいでいいだろ」

辰則はそう言った

「そうだな」

オレも満足な仕事ができただけで朝の日直は無事終了

「あー終わったあ 朝っぱらから疲れたわ」

辰則は日直の仕事が終わると机の上に崩れ落ちた

「たっつんお疲さんすね」

辰則に話掛けるのは志野しのである 喋り方が変わっているが面白いオレの友だ 外見は大人しい感じだが結構、話口である 皆のことを必ずあだ名をつけて呼んでいる

辰則の場合は「たっつん」と呼んでる

「おー志野っちおはよう」

机に倒れこんだまま辰則は答えた 「志野っち」とは志野のあだ名で皆そう呼んでいる

「志野っちおはよう 今日も元気だな」

「おはようですドラさん！ 今日暑さに負けず頑張るっすよ！」

オレのことは龍二の龍Ⅱドラゴンだから「ドラさん」て呼ばれてる

「ちよっと朝から何バテてるのよ」

「これはこれは、モミジさんおはようございます」

「あたしは楓かえでって言ってるでしょうが——っ！！」

来るやいなや、突然襲ってきた これはいつもの日課でもあり、あさつでもある

「悪い悪い でもさー楓もモミジも一緒じゃねーか」

「そんなこと私が知るか——っ！」

こいつは楓 いつもオレと辰則は楓をモミジと言って、カラかったら だけど辰則が言っても怒らないのが謎である 外見は肩にかかるほどの髪でいつも髪留めがついてる 見た目はかわいい感じではあるが短気で怖くて恐ろしくて……

「狩野かりの…あんた今あたしの悪口言ってるでしょ」

「え？ いや何のことやら…」

「と、ところで皆は夏休みは何してたんだ？」

オレは慌てて話を切り替えた。それにしても、何て感の鋭い奴なんだ…こいつ心が読めるのかっ！？」

「オレは野球だ」

流石は野球部部长。真夏にも関わらず頑張ってるようだ

「自分は虫取りっす。昨日はカブトが豊作でもう最高っす！」

志野っちは相変わらずの虫好きだな。この前遊びに行ったけど、家に虫は一匹もいなかった。どうやら違う場所に虫専用部屋でもあるのかも

「あたしは花恋^{かれん}と海行^{いがらし}って来たんだけど……」

「そういえば五十嵐はまだ来てないな？」

あたりを見ると五十嵐の姿がなかった

五十嵐とはオレのクラスメイトの一人で、明るい性格で何でも挑戦するワイルドな奴だ

だけど見た感じはどこかのお嬢みみたいな感じで。一部の男子にモテモテである

ちなみにオレは特に気にせず接しているが、一部の男子からの呪いの視線を感じたりする……

「それが今日電話したら風邪引いたみたいだから休むって。たぶんこの前あたしが海連れてったからだと思うの……」

「そんなことねーよ。気にすんなって」

「うん……」

いつも元気なモミジが元気がなくて少し心配になった

「おおーい席つけ授業始めるぞ」

「やべもうこんな時間かよ」

「えーそれじゃあ残り少ない夏休み優雅に過ごしてください」

「あーあと、狩野と武田。今日の午後の日直の仕事はなしでいいぞ」

「おっ！マジっすか！ラッキー」

辰則はうれしそうに騒いでいた

「わかりました」

オレはいたって冷静に対処しておいた

「起立、礼―」

「んじゃまた今度遊ぼうな―」

辰則はそう言って野球部の練習に行った　よほど日直の仕事がなく
て嬉しいんだな

「ドラさん今度虫取り行かないっすか!？」

「おうまた誘ってくれな　あんま無茶するなよ？」

「だーいじょうぶっす！　それではまた―」

「おーまたな―」

「あたし花恋の様子見てくるね　じゃまたね」

「ああオレからお大事になって伝えといてくれ」

「わかったわ　じゃーね」

「……モミジ!」

「?　何」

「あんま自分を責めるなよ?　大丈夫だからさ」

「…ありがと　あーっあ、あんたに心配されるなんて雨でも降るん
じゃないの?　やめてよねーもう」

少し元気になってくれたのだろうか、いつものモミジに戻っていた

「こんな真夏だ　少しは雨降ってほしいだろ」

「まったく　あたしは大丈夫よ　あんたこそ自分のこと責めてたら、
あたしがガツンって言ってやるからね」

「ははっ!　頼むわ　んじゃーまたな」

「うん　またね―」

ふう…こんな日常も悪くないな　いつまでもこんな日々が続いたら
いいな……

「君は本当にこのままあの世界に残ってもいいと思ってるの?」

どこかで聞いた声だった　その瞬間目の前の景色が変わっていた
何もないただ真っ白な世界が……あたりを見渡すと誰かがいる

「お前は……前に夢に出てきた」

夢に出てきた人？らしき奴だった

「どういうことだ？」

「夏休みが終わると同時に君はあの世界から抜け出すことができなくなるんだよ」

「あそこは君のいる場所じゃない 本物の世界に戻ってこるべきだ」
「仮の世界で生涯を生きるか、本物の世界で現実に向かって生涯を生きるかは、この夏休みまでに決めなくちゃいけない」

「ちょ、ちょっと待て 会って早々何の話だよっ!？」

オレは突然の宣告に戸惑いと隠せずにいた 仮の世界？ 本物の世界？ どう言うことなのか、さっぱりだった

「あんたこの前夢に出てきた奴だろ？ お前はいったい誰なんだよ お前は何者だ」

「そうだね仮の名前だけど僕の名前は「シン」て呼んで」

「仮の名前？ シン…？ どうして仮なんだ」

「今の君では僕の本当の名前は届かない…いや一生わからないかもしれない 僕の本当の名前を知りたいのなら、君の存在を理解しなければならぬ」

「オレの存在？」

「そう、君は誰なのか何故あの世界にいるのか、本当の自分を理解しなければ答えは見つからない」

「なんだよそれ オレの名前は「狩野龍二」だ この世界にいるのはオレがここで生まれたからだ これでオレを理解したことになるだろ」

「本当にそう思うの？」

「…どう言うことだ」

「君の名前は本当に狩野龍二なの？ なぜそう言い切れるの？」

「そんなもんオレの記憶にあるからだ」

「違う 君は君の友達がそう呼ぶから自分の名前は狩野龍二なんだと認識しているだけでしょ？」

「なっ…何言ってるやがる、それじゃオレは記憶をなくしていて覚え

てないみたいな言い方じゃねーか」

「近いけど違うね……君は本当の記憶そのものが最初からないのだから」

「記憶そのものが……ない……?」

予想外の言葉にオレはどこか遠くに意識がいつてしまいそうだった
こいつは何を言ってるんだ? いきなり出てきて記憶がないだの意
味がわかんねー

「そう、記憶を忘れているのじゃなくて最初から存在しない」

「おかしいだろ オレはこの世界を昔から知ってる 学校だって友
達の名前だって それは記憶があるってことだろ」

「それは君があたかも昔から知っているかのように自分で記憶を創
造したからだ」

「創造? 自分で作っただと? 何言ってるんだよそんなことがで……」

「できるんだよ君なら、あの世界なら」

「なっ……」

言いきる前に断言された言葉に動揺し言い返す言葉に詰まった

「君は僕と別れた後に君の理想があの世界を創造したんだよ そし
て記憶も一緒に作った」

「なんだよそれ、何でお前はオレのことを知ってたんだよ オレとお
前……シンはどう言う関係なんだ この世界はオレが作った? じゃ
あオレはいつたいなん……なんだ……なあお前はオレの何を知ってるん
だ! 教えてくれよ!」

「……それは……」

「頼むよ 教えてくれ! 頼む!」

「……」

「話してくれよ!」

「………わかったよ………本当の事を言おう」

シンは突然、重々しく話始めた

「本当のこと?」

「そう 今から君がしてきたことを教えるよ これから言うことは

まず全て話を聞いてから質問してほしい　そうじゃないと話が進まないと思うから」

「わかった…」

「まず、簡単に言うとは僕は本物の君だ　そして君は僕の偽物だ」

「ちょ、ちょっと待てよ！　……！」

出だしから突然すぎて思わず質問してしまいそうになった

「…続けてくれ……」

一瞬で聞きたいことがたくさん浮かび上がったが、何とか冷静になろうと自己暗示をかけて自分を落ち着かせた

「僕は君が今いる、あの創造世界から連れ戻しに来た」

「君は僕の体から離れて、もう一人の僕となって君しか入れないあの創造世界に逃げた」

「でももし素に戻ってきてくれる気があれば素に戻ろうと思って君に選択を聞きに来た　今から君の本当の記憶を教える　これから言うことで君はどう思うか教えてほしい

「……………（コク）」

オレはそう言われると静かに首を縦に振った

「本物の君は幸せとは程遠い悲惨な毎日を送っている　今まで普通の幸せ何て感じたことがない」

「家族も学校も生活環境も何もかも嫌な思いしかしてこなかった…：そして学校の帰り道で偶然事故に会い今僕らは、病院で深い眠りについている」

「命に別状はないけど植物状態に近いとされていて目覚めるかはわからない」

「……これが本物の君の世界だよ　一通り聞いて君はどう思う？」
「……………」

シンは本物のオレ？　なんだよそれ、オレが偽物ってどう言うことだそれに何て人生なんだ…：それがオレの本物の人生だったのか　だからオレはこの世界に逃げてきたってのかよ
そんなことならオレはいままで通りこの世界で生きる　いや誰もが

そうするだろ？

真実を聞いて、何から考えればいいのかわからなくなりオレは1人で考え込んでしまった

「……今、君のいる世界は君が作り上げた創造世界 君の理想が現実となっているのが、あの世界だ 建物も学生生活もそして友もだ」
黙り込んでいたオレに対してさらに真実を語り始めた

「理想を現実には……？ だったらオレは今まで1人ごとを言っていたってことなのか?!」

「簡単に言えばそういうことになるのかな でも君は理想の生活、理想の友がいるのだよ」

「理想ってなんだよ それはオレが求める生活や友でいるのかよ だったら豪華なマンションやオレに従う友が作れるってことか？」

「そう言うことだね」

「つぎけんよ！ 何が理想の世界だ そんな偽りの世界なんて居たくねーよ そんなことならオレは本物の世界に帰る だってそんな世界居ても楽しくねーだろ！」

「だけど本物の世界に戻るならば悲惨な人生を送るかもしれないよ？ 人生は何が起こるかわからないからね」

「でも今いる君の世界は君を中心に出来ている 最高の世界かもしれないじゃないか」

「……シン、お前はどっちに決めさせたいんだ さっきと言ってることが違うじゃねーか？」

「……たしかに、僕は本物の世界に戻ったほうがいいと言った」

「だけどこれは重要な選択なんだ だから君には十分考えてほしいのだよ」

「リミットまでまだ時間はある けどもし本物の世界に戻るのであれば条件がある」

「条件？」

「そう、その条件とは「僕の本当の名前を知り答えること」 それが条件だ」

「僕の名前を知るには、さっきも言ったけど君の存在を理解すること 僕が言った君の現状や真実を素に自分の存在を理解するのだよ」
「リミットは8月31日 午後23…59 僕はその10分前に君の前に現れる …そろそろ時間だね」

「おい待てよ！」

「いいかい 次君の前に現れた時はどちらの人生にするか答えてもらうから、それまでによく考えておくんだ じゃあね……」

本物の世界…オレは偽物…人生の選択…あまりにも大量の情報が頭に詰め込まれたようでオーバーヒートを起こした頭によって意識をなくした

8月25日

「うっ……」

ミンミンミンミー……

目が覚めるとそこはオレの部屋だった いつものように暑い中セミが鳴いている

「たしか学校の帰りだったはずじゃ……」

その後のことを覚えていないが、いつの間にか家に帰って眠っていたようだ

「オレはどうすれば……」

〔本物の世界の君は悲惨な人生を送っている〕

「そんなこと言われて、本物の世界に戻りたいなんて思えるかよ…
…だけどこの世界だって…」

「くそっ こう暑くては頭が回らねーっ！」

「……少し出かけるか…」

真夏の日差しが容赦なく照らしながらオレは近くの道を歩いていた
「よおー龍二 こんな暑い日に散歩か？」

振り返ると辰則が元気に手を振ってこっちに来ていた

「何だ辰則か…」

「何だとはなんだよ 暑さでオレのこと忘れたのかよ」

「いや、そうじゃないんだが…」

「？ どうしたいいつもの龍二らしくねーぞ」

「悪い 今日は一人にさせてくれ」

「なんだよ今日は練習なくて暇してたのによー 連れねー野郎だな」
機嫌を悪くしてしまったまま辰則は去って行った

「…辰則もオレが作った人間なのか…？」

今の発言・行動もオレが考えたのか…？

この景色も生き物も…

この暑さもオレが考えたのか…？

何もかもオレが作った世界…

「創造の力…」

「！？」

「そうか、暑いなら涼しくなるように創造すれば……」
いやちよつと待てよ

「この世界はオレの創造で作られた世界のはずだろ？」

「オレが理想に思うことは創造されるはずだ なのに何の変化もない」

「もし創造の力ってやつがあるのなら今まで暑いと思った時に涼しくなっていたんじゃないのか？ だがそんなこと全くできてない……」

つまりオレには理想を現実にするなんてできない？

もしくは条件がいるとか…それか…シンは嘘を言ったのか？

それとも力がなくなったのか…クソっわかんねーな それにアイツの言うことを全部鵜呑みにしていいんだろうか…

「ダメだ、どこに行っても考えちまう もう帰ろう…」

家に戻るとまた考え始めてしまった それからずっと考え込み、いつの間にか月日が経ち気づけば3日も経っていた

「いつの間にこんなに経ってたんだよ…」

——現在 8月28日 午後1時

「考えれば考えるほどわからなくなってきたな…」

オレは家でこれまでの経緯をずっと考えていた 運よく夏休みで学校も休みだったから長く考えることができた だが一向に答えはないままだった

「はぁ何してんだろオレ……」

「本物の世界：創造世界：何でこんな究極の選択みたいなのさせられてんだよ」

「シンはオレが逃げたと行ってたが、その記憶はオレにはないから本当の理由がわからねー それにアイツも話してくれなかったな…」

「今分かったことと言えば自分で創造する力なんてのはもうないか条件が揃ってない もしくは最初からないことぐらいか」

「まあ創造の力なんて別にいらねーからいいけどな」

「それにしても、アイツもどうかしてるぜ あいつはオレなのに何もしないで全部オレに押しつけて…」

「考えるのも嫌になってきたな……」

嫌になる…？

「考えることが嫌になって投げ出す…か」

「そういえば何でアイツはオレに指示するだけでオレと素に戻ろうと言うばかりで行動しないんだ？」

「シンとオレは同じ人間なのにアイツは何でどちらにするのかの選択しようとは言わなかったな オレみたいに考えるのが嫌だからオレに任せたのか？」

「それともオレとシンは別の人間なのか？ そうだアイツの話を鵜呑みにしてはダメだ アイツは何かを隠しているんだ」

オレとシンは違う人間で、シンは選択をする審判みたいな奴なのかそれを…つまり……

「あーっダメだ難しすぎる どこを信じてどこを信じなかったらいいのか分かんねーっ」

「ふうー……今日も暑いが少し外に出て気分転換でもするかな」

また近くの道を何も考えず歩いていたら見覚えのある奴らがいた

「よー辰則 あれ志野っちも一緒じゃん 2人とも久しぶりだな」

3日も会ってなかったからか、懐かしく思えるな 前は考えなしに避けてしまったが、こいつらだって今を生きてるんだ 例えオレが考えて作った人だったとしても、これからは普通の人、普通の友達として接して行こう

「あードラさん久しぶりだー」

「志野っち元気にしてたかー!」

「自分はいつも元気だぜい」

「辰則も元気してたか!」

「ああ…」

「どしたの? たつつん元気ないっすよ?」

この前のこと、やっぱり傷つけちゃったのかもしれない 悪いことしちゃったな……

「あ…あのさ辰則、この前は悪かった ちょっと考え事してたもんで相手できなかったんだゴメン だからさ避ける感じ止めようぜ」

「いや違う……」

「?」

「…かき氷食って頭痛てーんだ」

「あ…そうだったの…」

辰則は別に前のこと気にしてないみたいだった オレが一人で考え過ぎてたのかも

「ところでドラさんは何してたのー」

「オレか? オレはちよっと人生について考えてたんだよなー」

「人生っすかー渋い男よのー」

「暑さでバカになったんだろ」

「バカはお前だろ かき氷如きでテンション下げやがって」

「ばっっ! かき氷なめてたら痛い目に会うぞ」

「なめてたから頭痛てーんだろ」

「クソっ 今日の龍二は反論してくるじゃねーか」

「はん いつもやられるオレじゃないからな 敵は弱らせてから攻めるべし」

「そんな事よりどこか行きやせんか？」

「んーそうだな 川でも行くか？」

オレは特に思いつかず適当に言ってみた 夏と言えば海だけど、ここは川の方が近い

「だったらさキャンプしよーぜ」

頭痛が治ったのか辰則が話に入ってきた

「キャンプ？」

「そう ただ川で遊ぶより泊って遊ぶほうが楽しいだろ？ モミジと五十嵐も呼んで皆で遊ぼうぜ」

「せっかくの夏休みだしな ちよつとは夏らしくするか」

「賛成っす！」

「んじゃさっそく連絡してみっか」

「オレはモミジに電話するから龍二は五十嵐に連絡してくれ」

「ああ…でも五十嵐この前風邪だったし大丈夫か？」

「んー…ま、聞くだけ聞いてみようぜ」

「そうだな」

「……あ、モミジ？ 明日いつものメンバーで泊まりでキャンプ行くんだがモミジもどうだ？」

「え？ ベ 別にいいけど」

「んじゃ明日、森乃宮学園の校門前で9時集合な」

「わかったわ」

「さてとオレは五十嵐に電話するかな」

「………出ないか……あ、もしもし？」

「はい」

「あ、五十嵐？ 急に電話して悪いな 風邪大丈夫か？」

「うんもう大丈夫だよ」

「そっかよかった 病み上がりであれなんだが明日いつものメンバーで泊まりでキャンプ行くんだが五十嵐もどうかなと思って電話したんだよ 今モミジにも連絡してんだ」

「キャンプ？ うん行く！」

「よかった！　じゃ明日森乃宮学園の校門前9時に集合な」

「うん！　わかった！」

「それじゃ明日な……辰則、五十嵐大丈夫だってさ」

「レンさん元気になったんですね？　よかったです！」

レンさんとは志野っちが五十嵐のあだ名をそう呼んでいる　カレンの「レン」である

「おおこっちもOKだってさ」

「そんじゃ明日の準備でも買いに行くか」

「へい！」

「ああ」

明日行くキャンプ場には、なんでも揃ってるらしく特に買い物はなかったが、無駄に必要な物ばかり買った　唯一必要な物は虫避けスプレーと蚊取線香だけだった

「よっしゃこれだけあれば遭難だってへっちゃらだな！」

「遭難してどうすんだよ：　つーかキャンプで遭難てなあ」

「いやいやドラさん　何事も万全の態勢で臨まねばいけませぬぞ」

「志野っちの言う通りだ　無いよりはあったほうがいいだろ　んじや帰るぞー」

「もう何でもいいよ…」

買い物済ませ、しばらく歩いていると辰則の家の近くに来ていた

「そんじゃあまた明日会おうな」

「ああまた明日」

「たっつんまた明日あー！」

「志野っちもな」

「龍二　明日は寝坊すんなよ？」

「わーってるって　ちゃんと目覚ましセットしとくから安心しろ」

「おし　念は押したから大丈夫そうだな　この荷物はオレが預かるとくよ」

「おお悪いな　じゃよろしく頼むわ」

そう言ってオレが半分持っていた買い物袋を持って行った

「へいへい　じゃーなー」

さらに歩いていると、次は志野っちの家の近くまで来た

「それじゃあドラさん、おいらはここでお別れっす！　また明日会いましょうねー」

「おう！　また明日な　あ、そうだ明日は虫取りしような　この前誘ってくれてただろ？」

「マジっすか！？　うれしーな　準備はおいらがやっとくので安心してくだせい！」

「わかった　よろしく頼むよ！　じゃあ明日」

「はいー！」

志野っちと別れると、夕日を浴びながら帰宅した

「ただいまぁ」

お帰りと言わんばかりの熱気がお招きしてくれた

「うがぁ熱い……窓全開にしないとな」

熱気が冷めるまで、晩飯のことを考えていた

「んーと、これだとカレーが作れるな」

材料を確認すると、いかにもカレーを作れと言わんばかりの食材だけがあつた

「とりあえず何か飲もうっと」

「冷蔵庫にはジュースもキレていた　：コーヒーで我慢しよ」

粉のコーヒーを水で溶かし氷をいれて出来上がり

「はい完成っとな」

少しだけ熱気がとれたがまだ熱いのに変わりはない

「ズズズズーっ」

何となくストローを入れ、音を立てながらコーヒーを飲んでみると、だんだん熱気が消えてきた

「よし　もういいかな　晩飯作るか」

ようやく熱気が取れ、カレーを作り始めた

「水を温め沸騰したら5分温めます　か、了解ですぞ」

カレーといっても本格カレーではなくレトルトのことだ

「いっただきまーす」

沸騰して5分が経ちようやく晩飯ができた

「やっぱレトルト美味しいわー これを超えるカレーなんて無いだろうな はっはっは」

美味しいカレーをたいらげ、次は風呂の準備だ

「風呂風呂っ」と

風呂が沸くまでテレビをつけて、時間を潰した

「ったく、最近は何にも面白いのねーじゃんか」

「風呂沸いたでー はよ入れやー」

テレビに愚痴をこぼしていると、風呂が沸いたことを音声知らせてくれる

「あーっさっぱりさっぱり、さてどうしょっかなー」

時刻は午後9時

「まだ寝る時間じゃねーな でもやることねえしな……お休みい」
寝ることにした……

現在8月29日

いつもと変わらずセミの声が最初に耳に入ってきた

「はいはい起きますよ ったく目覚ましいらねーじゃんかこれ」

アナログ時計をみると針は8時を指していた

セミに文句を言いつつキャンプの準備を始めた

「……よし まあこんな感じかな」

持ち物はいたって普通で、だいたいのは昨日買ったから特に必要なものはなかった

「さて、そろそろ待ち合わせ時間だな」

「暑っちーな……」

荷物が入ったリュックを背負っているからかいつも以上に暑い

「ああやっ和学校見えてきた」

微かに見える学校 まるでオアシスを見つけたかのように感じた

「まさか幻とかじゃないだろーな……」

「おっ！ 来た来た」

誰かが呼ぶ声がした この声は辰則か？

「なんだ龍二 今日は遅刻しなかったのかよ」

学校につくなり、何てことを言うんだこいつは…

「今日はセミが起こしてくれたから大丈夫だったよ」

「つーかまだ辰則とオレしか来てないのか？」

結構遅く家を出た気がしたが、ずいぶん早く着いたのか

「何言ってるんだ？ まだ8時だぞ？」

「え？」

さすがの辰則も暑さで頭がおかしくなったんだ

「ほら学校の時計見てみろ」

辰則が指さす方向にあった時計をみるとたしかに8時だった

「マジかっ！」

頭がおかしかったのはオレだったようだ

そう言えば時計をちゃんと見てなかった気がする…

今度はデジタルに変えよう

「てか辰則は何でこんな早いんだよ！」

「オレか？ んー実はだな今日が楽しみで寝れなくてさっきまで自主練してたんだ」

「お前は遠足前の子供か…」

無理に寝ずに体を動かすってところが辰則らしいな

「どうだ まだ時間あるし龍二も野球するか！」

「いや勘弁してくれよ こんな暑さで動いたらキャンプどころじゃねーって」

「そうか そりゃ残念だ」

「まあのおんびり待つとしようぜ」

「そうだな」

「おーい！」

くだらない話を40分ほどしていたらどこからか声が聞こえる

「たつつんにドラさーん！」

あれは志野っちだ 背中から何か棒が突出してる たぶん虫取りアミだ 昨日約束したからな ちゃんと持ってきてくれたんだ

「おはようさんす」

「おうおはよう志野っち」

「おはよう志野っち その荷物はもしかして」
分かりつつも聞いてみた

「そうっす キャンプと言えば虫取り…カブト取りっすよ！ こっちは魚用のアミっす」

まさか魚用も持参してくるとは、食糧の調達は志野っちで決まりだな
「さすが志野っちだ！ キャンプの事をよく分かってる」

なぜか辰則も、ハシャいでいる

「ドラさん今日は虫取りまくりましようねー！」

「おうそうだな オオクワガタでも取ろーぜ」

「おっまたせー！」

「遅くなっちゃった」

続いてやってきたのはモミジと…五十嵐だ！ よかった元気になったみたいだ

「二人がギリギリなんて珍しいな」

「ごめんなさい 私が寝坊しちゃって遅れちゃった」

「五十嵐も寝れなかったとか？」

「え？ ど、どうしてわかるの??」

「いやここにも同じ感じの奴がいたからさ」

「武田君も寝坊さん？」

「いやオレは寝れなくて朝から自主練してたんだ！」

「そうなんだ！ 私は遠足みたいで楽しみだったから寝れなくて」

「何よ花恋 もう子供じゃないんだからー」

「ま、時間には間に会ったんだいいじゃねーかな！」

「そうだな そんじゃさっそく出発しようじゃないか!！」

「」「おーっ!」「」

辰則の合図で学校を出発した

真実を知る前（後書き）

読んでいただきありがとうございます

内容が途中で終わっていますが、文字数の関係で分けたので次の話で完結します

真実を知った後（前書き）

これで完結します

最後まで読んでいただけるとうれしいです

真実を知った後

電車で1時間ぐらいで目的地の駅についた

「あーっやっと着いたー！」

駅を降りると同時に大声で叫んでいるのはモミジである

ホントモミジはいつも元気だな

「ねえねえ皆で写真撮ろうよ！ 到着記念に一枚 ね？」

「おーいいな 撮ろうぜ！」

乗り気な辰則

「はい並んでー」

「志野っち…アミでオレの顔が映らないんだが……」

写真を撮ろうと志野っちの後に並んだら、アミでカメラに映らなかった

「ドラさん、これも虫取りのためっす我慢するですよ」

「五十嵐もっところちこいよ フレームから外れてるぞ」

「う、うん でも何だか恥ずかしくって」

「はいはい撮るよー もっと詰めて詰めて あたしも入るんだから」

「モミジは入りきらねーんじゃねーか、そのしr」

ドスッ

「ゴメンな…さい……」

今のは辰則が悪いぞ…

「…さて次はバスだぞ」

「えーっまだ着いてないのー？」

まだ目的のキャンプ場につかないことに文句を言い始めるモミジ

「あとはバスで40分ぐらいで着くから頑張れ」

「楓ちゃんもう少しで着くから頑張って！」

さっきからモミジがうるさいのは実はモミジは乗り物に弱く、しかも道は田舎道でガタガタのため余計に辛いみたいだ

「千代山公園前ー千代山公園前ーお降りの方はボタンを押してくだ

さい」

アナウンスが目的地を言った　そろそろ着くみたいだ

「志野っちボタン押してくれるか？」

「はいです！」

「楓ちゃん着いたよ　降りれそう？」

「何言ってるの花恋…意地でも降りてやるわよ……」

苦しみながらモミジが答えた　相当辛いみたいだ

そしてようやく目的地に到着した

「ひゃっほーい！　着いたー！！」

さっきまでの地獄から解放されたかのようにモミジが元気にハシャいでいる

目的地は千代山公園でところで、公園と言われているが実際には遊具とかはなく、ほとんど自然を残したまま一部をキャンプ用に作られた場所だった

「結構綺麗なところだな」

イメージ的にはゴミがそこら中に落ちて汚いのかと思ったけど、ここはちゃんとマナーを守っている人が多いんだ

「んじゃオレと龍二で窓口行って許可貰ってくるから、ちょっと休憩しててくれ」

「え？　オレも行くのかよ　辰則だけで大丈夫だろ？」

窓口如きで何でオレまで連れて行くんだ？

「こまけーことは後でだ　ほら行くぞ」

「いらっしやませー」

「学生5人でキャンプしたいんですが」

「はい　学生5名様ですね　それではここにお名前と調理器具の覧に丸を振ってください」

調理器具…なるほどなこれを持っていくのにオレを連れて来たのか他のメンバーは女子2人に力仕事は無理だし志野っちは虫カゴで手が塞がってるからオレになったんだ

「それじゃこれで」

「はい かしこまりました 何かあれば窓口にお声をかけて下さい
それではごゆっくりと」

「よし龍二 器具持ってくぞ 野菜も後から取りに行くからな」
「おうわかった」

そう言えば辰則ってここ来たことあるのかな？ ずいぶんと手際が
いいけど

「なあ辰則」

「ん？ 何だ？ もう持てないとか言うなよ」

「ちげーって、辰則ってここに来たことあるのか？」

「まあな 野球部でキャンプする時があつてよくここに来てんだ
窓口とかは先輩がやってたけど見て覚えてたってとこだ」

なるほどだからこれほど手際がいいのか こう言う時経験がある奴
がいると助かるな

「それじゃ今日は辰則がリーダーしてくれよ その方が段取りしや
すいし」

「ん？ まあ別にいいが 果たしてうまくいくだろうか…」
なんだろこの出しきれない感じは…

「ま、頼んだわ」

「へいへーい」

重い荷物を持って、さっき志野っちたちが居たところに戻った

「あれ？ いない…」

場所を間違えたのだろうか 3人ともいない

「やっぱりな…」

「やっぱり？ どう言うことだ？」

「あれ見てみろ」

辰則は呆れた顔をして指さした
「ん？」

オレは指さす方向に目をやると

「見て見てっ！ 池があるよ花恋っ！」

「ホントだー おっきい！」

「虫はどこっすかー どこにいるっすかー」

「……………」

「な？」

なるほどな…そう言うことか

「ああわかった これは一筋縄ではまとまらないだろうな」

「おーいお前らー置いてくぞー」

「あっ、ちよっと待ってよ」

「虫…虫はどこにいるっすか！」

「志野っちも行くぞー 虫は後でも取れるだろ」

「うう…わかったっす」

へえバラバラだったのにもうまとめやがる 流石は部長だけはあるな

「よし着いたぞ ここがオレらのキャンプ場所だ」

行きついたところは、意外と他の人もいなくて静かな場所だった

近くには森が陰になって真夏でも涼しい これはいいな

「ねえねえお昼にしようよ」

「おおそうだな、そういやもう昼だったんだ」

「お昼は何にするの？ やっぱりカレー？」

「いやカレーは夜だ、昼はバーベキューにするぞ！」

「わーいバーベキューだー！」

「てなわけで、今から食糧班と設置班に分かれるぞ」

「食糧班は3人、設置班は2人でいいだろ」

「OK それじゃ、じゃーんけーん」

「「「「ぽん！」「」「」」」」

凄いことに一回で決着となった……

「よしじゃーオレと志野っちとモミジで食糧確保だ 龍二と五十嵐は設置を頼んだぞ」

「あたしも設置がよかったー ブーブー」

「負けたことにグダグダ言ってるな ほら行くぞ」

てか普通、負けが設置班なんじゃないのか……？

辰則は体は丈夫

だが頭は危険みたいだ

「よし やろっか狩野君！」

「お、おうそうだな」

五十嵐、何だかやる気が満ち溢れてるな そんなにキャンプが楽しみだったのか

「じゃーオレはバーベキューの土台作るから五十嵐は、皆が座るイスとか机並べてくれるか？」

「はいはい！」

流石はキャンプ場と言えるだけのことはあった キャンプ場にはバーベキュー用セットの貸出はもちろん、ハンゴウをするための土台がレンガで既に出来ている

さらにはカレー用の土台まである そして極めつけは食糧を現地調達（購入）で手に入るなんて…

イメージとしては全て最初から作っていくのかと思ったが、以外にも親切心なのか楽しみを奪われたのか分からない感じがする

オレのイメージはもっとサバイバルな感じで食糧も川とかで現地調達、土台も河川から大きな石を持ってきて積み上げていくのだと勘違いしていた

もしかするとオレって時代遅れなのか…？ てかよくよく考えると設置班は勝ち組だったな 悪い辰則…頭を疑って悪かったよ

そんなバカげたことを考えていると、誰かが話掛けているのに気がついた 五十嵐だ

「狩野君こっち終わったよ？」

「え？ もう終わったの？！」

いつの間にそんなに作業が進んでいたんだろう

「だってもうセットされてたもん」

「あ、そうだったんだ オレ気がつかなかったよ スマンスマン」
たしかに配置されてた、何でこんなことにも気がつかなかったんだろ 視野が狭いなオレって…自分のことに集中しすぎて周りを把握できてなかったみたいだ

「私も、それ手伝おっか？」

作業途中だったバーベキューの土台（…と言っても組み立て式のセツト）をみて五十嵐は手伝ってくれた

「ああ助かるよ サンキューな五十嵐」

「何のこれしきっ！」

五十嵐が手伝ってくれて準備がすぐ出来た あとは辰則たちが食材持ってくるの待つだけだな

「オレらの作業終わったし、ちょっと休憩するか」

みんな帰ってくるまでここを離れるわけにはいかないが特にすることもなかった

「そだね それじゃお言葉に甘えて座っちゃおっと」

「……………」

「……………」

うーんこれはどうしたらいいんだ…座って待ってるだけってのもあれだし、何か話すべきなんだろうけど話題が出てこない…あ、そうだな、そう言えばちよっと聞きたいことがあるんだが」

「ん？ なぁに？」

これって聞いても大丈夫だろうか…間違って傷つけたらどうしよう…いやこれぐらい大丈夫だろ よしっ

「五十嵐さ、この前風邪で学校休んだじゃん」

「うん そだね」

「あれって、もしかしてモミジと海行ったから風邪引いたのか？」
「やっぱり聞くべきじゃなかっただろうか…でも今さら後悔してもダメだな この前のモミジの様子も気になってたし この際当たって砕けちまうか！」

「あーあれ？ あの時海が原因で風邪引いたんじゃないよ」

「そうなのか？」

意外にもあっさり答えてくれた

「実はね、学校の前日にクーラーつけて寝ちゃって、そのせいで体が冷えて風邪引いちゃったんだ」

「何だ そうだったのか」

「もう何だじゃないよっ 朝起きたらすっごく寒くて大変だったんだからね！ もう最初は雪国に行っちゃたんだと思ったぐらい寒かったんだよっ！」

「はははっ そりゃビックリするわな」

「それに、海に行ったのは学校行くもつと前だから全然まったく関係ないよ でもそれがどうかしたの？」

「あ、いや…珍しく休みだったからどうしたのか気になってさ でも元気になってよかったじゃん」

「うん 今日来てよかったあ」

「…五十嵐」

「ん？」

「後でさ、モミジにもさっきのこと話してやってくれねーか？」

「さっきの？ クーラーで風邪引いたこと？」

「ああ そのことだけ言ってくればいいからさ」

「？ うんわかった 楓ちゃん帰ってきたら言うね」

「ありがとな」

「ふふっ」

「な、何だよ」

「ふふっゴメンね 何で狩野君がお礼言ってるのかなって思ったから」

「い、いや別に何となくだって 教えてくれたから一応お礼をと思っ
って」

「お礼を言うのは私の方だよ 今日キャンプに誘ってくれたお礼を
言わなくちゃね ありがとう それに私の風邪のこと気遣ってくれ
てありがとう 何だか今日は感謝がいっぱいだね」

「ははっ 何か照れるな／＼」

五十嵐にお礼を言われて、ちょっと恥ずかしくなったオレは頭をく
しゃくしゃとかいて気を紛らわした

「おーい準備出来てるかー？」

この声は辰則だ　ちょうどいい感じの時に帰ってきやがった　もう少し空気読めよ辰則め

「ああこっちは完璧だ」

と言っても、バーベキューセットを組み立てただけなんだが

「そっちはどうだ？　良い食材あったのか？」

「ドラさん見てくだせいこれを！」

志野っちが何やら興奮気味でオレに見せてきた

「ん…？　どうした？」

志野っちが手にしていたものを見してみる

「おおセミの幼虫じゃなかった！」

セミの幼虫なんて初めてみた　だいたいは抜け殻で中身が空っぽだが　こいつにはぎっしりと身が詰まって動いている

「オレたちが食材取りに行ってるときに見つけたんだ　オレも幼虫なんて初めてみたな」

「ほらほらそんなことより、早く昼ご飯作りましょ」

男どもがハシャイでいる中、モミジが痺れを切らしていた

「おーそうだったな　食材は見ての通り豊作だったぞ」

「店にあるんだから当たり前でしょ」

モミジによる鋭いツツコミで辰則は撃沈された

「おいら、こいつを虫カゴに入れてくるっす」

ここにきて最初の虫がセミの幼虫なんて凄いもんだ　これならオオクワガタだって取れるかもしれないな

「私も焼くの手伝うね楓ちゃん！」

「ありがとう花恋　あんたは男どもと違って頼りになるわ」

「私だって、女の子ですから料理は任せてっ」

「男どもは役に立たないから、焼けるまでどっか逝ってなさい」

「おい字が違うぞ　オレたちを殺す気か！！」

「しゃーない　辰則どっか行こうぜ」

「ったく　おーい志野っちも遊びに行こうぜ」

セミをしまいに行った志野っちも誘いにバーベキューの場所から少

し離れたところの荷物を置いた場所に行くとき志野っちが何かしていた
「おいらは、少しやることあるんでパスでえ」
やることって何だろ…虫取りの用意とかかな？

「そっかわかった」

「んじやオレと龍二でそこらへんブラついてくるから」

再度、バーベキューのところに行き伝えたと

「はいはい逝った逝った」

「だから字が違うっての　何か怒ってんのか？」

「べっつに」

これは怒ってるな　歩きながらモミジたちから声が聞こえないところ
で聞いてみた

「おい何かしたのか辰則？」

「オレは何もしてねーって」

「ホントにかあ？」

「……まああるとすれば、さっきのセミを見つけてオレと志野っち
でハシャいでて帰りが遅くて昼飯が遅くなったぐらいじゃねーかな」
……それしかないな

「とにかくモミジの機嫌が戻るまで帰らないでおくとしよう」

「そうだな…」

オレと辰則は特に行くともなく、ふらふらとキャンプ場を歩いて
いた　少し離れたところに広場があった　そこでは子供たちが持参
したオモチャで遊んでいる光景が見えた

「こーやって見ると結構人いるんだな」

「そうだな　やっぱ夏はキャンプってのはみんな同じ考えなんだろ
家族でとか仲間に来てるのが多いな」

「ねえ向こうに川があるよ行ってみようよ！」

「行く行く！」

オレたちが通り過ぎた家族連れの子供たちが何やらハシャいでいる
のが聞こえた

「へえここ川もあるんだな」

「みたいだな 後で行くか？」

「そうだな みんなにも言ってみるか」

「そろそろ機嫌治ったかな？」

「食材が香ばしく焼ければ治ってるだろうな」

「どんな機嫌の治り方だよ…まったく」

「いったん様子見に行ってみるか？」

「ああ」

オレたちは隠れながら、元の場所に戻ることにした

少し時間がさかのぼりオレたちと別れた（追い出した）後……

「さあて始めましょっか」

「おっけーい 何から焼いてく？」

「そうね やっぱお肉かな？ それとも野菜？」

「両方入れちゃえーっ！」

「そうね、適当に焼ければいいってことにしましょ」

「うんうん！」

「あ、そうそう楓ちゃんに言うことあるんだった」

「ん？ 何？」

「私この前私風邪で学校休んだじゃん」

「え？…う、うん…あのね花恋っ…」

「あれって、学校の前の日に冷房つけて寝ちゃったからなんだあ

もうね朝起きたらここは北極ですかー！ みたいなの これからは

気をつけないとねー 楓ちゃんも冷房つけて寝ちゃダメだよ！」

「そ、そうだったんだ もうあたし心配したんだからね 花恋が休

む何てどうしたんだらうって 花恋もドジなところがあるのね」

「ホント私ってドジだよ もう夜は冷房付けないようにするんだ」

「そうね 寝ながらだと体温が下がって体に悪いから止めなさい」

「うん！ あっほら、そろそろ焼けてきたみたいだよ」

「ホントだ うん良いにおいね」

「楓ちゃんつまみ食いはダメだよ 私にもちようだい！」

「うぁお肉美味しい！」

「美味しいね！」

「美味しいのが出来たっす！」

「あれ？ 志野はあいつらと一緒に行かなかったの？」

「おいらはこれを作ってたんすよ」

「？ 何これ」

「これは、カブト虫をおびき出す特製の樹液っす」

「すごい！ 志野君何でも知ってるんだね！」

「うぁ：ねえこれホントに効果あるの？ 中身凄いことになってるわよ」

「これが一番効果的なんす」

「へえ樹液って意外と甘い物なのね これってバナナでしょ？」

「そうっす これには蜂蜜にバナナにお酒も入ってるんすよ」

「うげえあたしだったら寄り付かないわ」

「とにかくしまっけてきなさい ここじゃ煙の臭いがそれに混じっちゃうから」

「そうっすね 置いてくるっす」

「ところで、楓ちゃん」

「なに花恋？」

「テントは作らないの？ 私たち寝るとこないよ？」

「あぁっ！！ そうだ忘れてたわ！」

「あたしったらお昼のことしか考えてなかった」

「それじゃお昼食べたらみんなでテント作ろーよ」

「そうね 何なら男どもに作らせましょ」

「それにしても、あいつらどこまで行ってるのよ もう出来てきたつてのに」

「散歩に夢中なんだよきつと」

「……こちらアルファ 現在目的地周辺で待機している そちらの状況を伝えよ」

「…こちらデルタ 目標ネーム、デビルとエンジェルを目視でとらえた…ビートルは確認できない そちらの作戦を報告せよ」

「ラジャー これより目的地に潜入する 腹が鳴ったら作戦開始の合図だ」

「作戦了解…っ！ しまったデビルに気付かれた！」

「ちよつとあんたたち帰ってくるの遅いじゃないのっ！」

「「ごめんなさい…」」

「おい辰則、やっぱ帰ってくるのが早すぎたんじゃねーか？ まだ怒ってんぞ」コソコソ

「いや違う これは帰るのが遅れたんだ クソつあと少し早く帰ればよかったんだ」コソコソ

「それでどうする…これでは食にありつけないかもしれないぞ」コソコソ

「大丈夫だ ここは反省をすれば奴は機嫌を治してくれるだろう」コソコソ

「わかった じゃあここはその作戦で行こうか」コソコソ

「ああ よし行くぞっ」コソコソ

「「遅れてすみませ」」

「土下座」

「おいー！ 何で最後まで言わせてくれないんだよ やっぱ無理なんじゃね？」コソコソ

「大丈夫だ まだ土下座で確率が上がる ここは素直に言うことを聞くぞ」コソコソ

「「本当にすいませんで」」（土下座）

「切腹」

「ちよつとお？！ これヤバイもう無理だつてこれ 死んじやうよ？ 餓死する前に自分で死んじやうよ？！」コソコソ

「大丈夫だ」コソコソ

「大丈夫じゃねーよっ！！」

「あんたたちさっきから何コソコソ言ってるのよ——っ！」

「まあまあ楓ちゃん 切腹で許してあげようよ」

「「ありがたや ありがたや」」

何気に怖い単語が聞こえたがスルーすることにした

「ふん しょーがないわね あんたたち今日はあたしの奴隷よ」

「ははっ 五十嵐様何とでも言ったださいませ」

「何であたしじゃなくて、花恋なのよ!」

「いや…だって助けてくれたし」

「「なあー」」

声をそろえるオレと龍二

「さあ愚民ども、お昼にするよー!」

「「ははあかたじけない 五十嵐様!」」

「まったく調子いいんだから」

「あ、たつつんにドラさん帰ってたんすか」

「ああオレたち奴隷となって帰還してきたよ」

「オレたちにはもう自由がないんだ あとは頼んだぞ志野っち……」

「そんなー 助けてください 誰か助けてください!」

「はい助けてあげましょー」

「「おお五十嵐様 ありがとうございます」」

「「そしてありがとうございます 君は我々の神だ!」」

「はいはい茶番はそこまで、コゲるから食べましょ」

「「「わーい」」」

「あ、そう言えば後でテント作ろうよ!」

「テント? ……そういう忘れてたな これ食ったら作るか 女子どもに飯作ってもらったしテントは男どもで作ることにしような」

「そうだな……ところでもうこんなに肉とか食ったっけ?」

まだ食べ始めたばかりだったはずだが、気のせいかもしれない量が減っているような 特に肉が

「そ、そうよ あんたたちが気づかないうちに食べちゃったんだから その分きっちり働いてもらおうからね!」

「ゴメンね 私たちつまみ食いしちゃった」

「五十嵐は許す」

「ちょ、カレンー」

「えへへゴメンね 私嘘つけないタイプだからつい本音が出ちゃった」

「でもまあ飯を作ってくれたんだし、モミジも許してやるよ」

「もう…ゴメンってば」

「OK OK さっさと食って寝床作るぞー」

「おお」

「はいです！」

「「「「ごちそうさまでした」」」」

「よし さっそく作るぞ龍二、志野っち」

「えーっ？ もう働くのかよ 少し休ませてくれよ」

「バカヤロー！ すぐ出来ることはすぐにやるもんだ！ ほら立っ
た立った」

「うう苦しいっすよー」

「頑張れ志野っち ここで頑張れば虫がたくさん取れるかもしれんぞ！」

「おいら頑張るっす！」

何で志野っちはこうも虫の効果が強いんだ

「オレも頑張って動くか」

「そうだその息だ！」

「それじゃあ頼むわね あたしたちは少し休憩してるから」

「おお早く出来過ぎて寝れんかもしれんがな！！ はっはっはっ…
…」

「……すうすう……」

「はっは……は？」

「もう寝てるぞ」

「ウソ…だろ…」

「まあ五十嵐は寝不足でモミジは乗り物酔いで疲れたんだろう 寝

起きに殴られる前に完成させとこうぜ」

「ああそうだな」

「そうっすね…」

寝起きまでにせっせと作業を終わらせるため、急いで準備に取り掛かった。もちろんテントも貸出していたからわざわざ持ってくる必要がないのは助かる

それにしても何でも揃ってるんだな最近は…

「ところでさ、テントの作り方ってオレ知らねーぞ？」

キャンプなんて初めてだったからオレには何もかも新鮮すぎる。これでは役に立てないな…

「安心しろ。オレが知ってる。1人だと結構難しいが、3人なら簡単だぞ」

「たつつん監督よろしくお願いします！」

「おおよオレに任せとけ野郎ども！」

「そんじゃまずどうしたらいいんだ？」

「そうだな。まず場所を決めないとな。男子と女子の距離を離して作らないといけないから、そうだなーあそこでいいんじゃないか」辰則が指さす方向はちょうど小さな林の木が出っ張って壁を作っている場所だった。たしかにここだったら、見えないし良いかもしれない

「わかった。じゃあそこにしようか」

「最初は誰のテント作りやす？」

「そりゃモミジだろ」

「どうしてだ？」

「例えば寝起きに完成してなくても、モミジのテントがあればそこで眠ってくれるからな、一応保険として先に作っておこう」

なるほど、ここまで先を考えているとはな…恐れ入ったぞ辰則

「テントはこれでいいっすかね？」

特に指定がなかったから、誰がどれにするかは決まっていなかった。「たかがテントだ。何も文句言われたりしないだろう。志野っちそ

れ持ってきてくれ」

「了解っす！」

「よしじゃあまずは配置だな……ここでもいいだろ」

「適当過ぎないか？」

適当に周りをみて適当に決めるのはどうかと思うが

「配置で考えていては進まんからな　ここにモミジ城を作るぞ」

「へい監督っ！」

すっかり建築会社の気分の志野っち　一応オレも気分を作っておこう

「りょーかいです監督」

「バツキャロー！　半端な挨拶は半端な作業になってしまおうぞ新人
！」

……これじゃ作業が進まないじゃねーか

「申し訳ありません監督　自分頑張るので作業しましょう！」

「おし、いいだろ」

ふうやっと進み始めたな

「テントってのはな4隅をピンと張って釘で打ち付けるんだ」

「へい監督　こうっすか？」

「そうだ　良い感じだぞ志野っち君」

「ありやとうっす監督っ！」

「新人はどうだ？」

「こうっすか監督」

辰則がしたことをまねればできる作業だ　そう難しくはない

「ほおなかなか筋がいいじゃないか　お前は将来出世するかもしれ
んぞ　はっはっは」

「あざっす！」

「さあ後は1つ釘打てば完成だ　次は五十嵐のを作ろう」

1つのテントを作るのにそんなに時間はかからず　なんなく5人分
作れた……はずだった

「あれ？　テント4つしかなくね？」

よく見るとテントが4つしかなかった　店の人が数を間違えたのだ

ろうか

「ホントだな オレが1つ借りてくるから 後は頼んだぞ」

「ああわかった」

「了解っす」

辰則がもう一つ持ってくる間に4つ目のテントを組み立て始めた

「あ、ドラさんこれ見てくだけせい」

「どうした志野っち」

「このテント穴空いてますぞ」

「げっホントだ」

折りたたまれていたテントを広げると、大きな穴が開いていた

「これじゃあ夜、蚊が入ってくるっすね」

「店側に交換してもらうか」

ちよつとだけ辰則が帰ってくるのを待った

「おーい」

テントを借りに行った辰則が帰ってきた

「「あのさー」」

オレと辰則の声がかぶった

「あ、悪い先言ってくれ」

「わかった あのさ、テント借りにいったらもう予備がないみたいなんだ 今日はいつも以上に人が来てるみたいで余分ないそうだ」

「マジかよ…」

ここにきて出鼻を折られた そうなると交換も不可能だ

「で、そっちは？」

「ああこっちも非常事態だよ これ見てくれ」

オレは穴のあいたテントを辰則にみせた

「うあこりゃまたデカイ穴だな どうするよ交換もできんからな」

「今あるのは3つと訳あり物件が1つ さすがに穴が空いてては蚊が入って寝れないだろうから」

「そうだな 訳ありはオレたちの荷物をしまうとこにしよう あとは五十嵐とモミジは1人1つの方がいいだろうから、必然的にオレ

ら3人で1つのテントに入ることになるな」

「まあそれが妥当だわな 仮に女子2人で寝たとすると、オレらの誰かが1人優雅に過ごしてしまうから不公平だしな よし！ それで行こうか」

「志野っちもそれでいいか？」

「おいらは何でもいいっすよ！」

「そんなじゃま、訳ありだが作っちゃまおう」

「ああ」

「ほーい」

訳ありのテントも作り終え、モミジたちを起こしに行った

「おーいテント出来たぞー 五十嵐、モミジ起きろ」

「え？ もうできたの 早いわね」

「ううーん あれ？ みんなどうしたの？」

「テント作り終わったから連絡だ」

「もう出来たんだ 早いね！」

「それでだ、お前たちが寝てる間にいろいろ不祥事があってな」

「何かあったの？」

「ああ実はテントの数が思ってたより少なくてな」

「何よそれ、どう言うことなの？」

「まあ2人は普通のテントだから安心しろ」

「あんたたちは？ もしかして寝床がないとか？！」

「いやあるにはあるんだが、オレらは3人で1つのテントで寝ることにするわ」

「はあ？ そこまで数がないっての？」

「話すのもなんだ、現場をみて察してくれさ」

「わかったわ 行こ花恋」

「うん」

話すのが面倒になった辰則はテント場所をみせて説明を省いた

「……悲惨な現場ね」

「だろ？ とりあえずこっちが女子のテントだ」

「荷物はこの穴空きテントに入れておくことにしたから　そうすりや中も広く使えるだろ？」

「でもいいの？　あんたたち3人も入らないんじゃない？」

「私たち一緒に寝るから、私の分を使っているよ？」

「いやそれじゃあ不公平になるから止めたんだ　だからこれで大丈夫だ」

「そう：ならいいんだけど」

「それより、テントも作ったし昼からは何して遊ぶよ？」

「そう言やさつき川があるって耳にしたんだよ　どうだ川行くか？」

オレと辰則が広場で川があるのを聞いたことを思い出した

「おいら虫取りがしたいっす！」

「しょうがないわね　ずっと行きたがってたし、あたしは虫取りでもいいわよ」

「私もそれでいいよ！」

「そんじゃまずは虫取りに行くか」

「わかった」

オレたちはキャンプ場の近くにある小さな森の中に入って行った

「ここは日が当らなくて涼しいわね」

「紫外線に気を遣わなくて済むね！」

「ところで志野っち　今日は何取るんだ？」

「そうっすねー　昼間はだいたいセミがメインっすかね」

セミかあ　毎日オレを起こしてくるにつくき宿敵か：だが今日はそのことは忘れてやるとしよう

「しかし見つかんねーな　声はどこからでも聞こえてくるってのに」

「場所が薄暗いっすからね　セミも木と同化してるんすよ」

「あっ！　いたわよ」

モミジの声でセミは逃げて行った

「セミは警戒心が強いっすから隠密が基本すよ」

「そうなんだ　ゴメン」

「大丈夫っす まだまだそこら中にいるっすからね」

「わかったわ 次は静かに教えるわ」

セミ探しを始めていつの間にか2時間がたっていた

「結構取れたわね」

「豊作っすね！」

「おーいみんなこっち来てみる」

辰則が突然オレたちを呼ぶ声がした 何かあったんだろうか

「昼間言ってた川があったぞ」

偶然森を抜けたところに川があった ここがさっき聞いた川だったのか

「わぁーホントだ！」

「魚が泳いでるよ！」

「ちよつとここで休憩していこうか」

「そうだな、さすがにちよつと疲れた」

「おいら少しやりたいことがあるんで、また森に入ってくるっすね」

「おお気をつけてな」

「たぶん遅くなるかもしれないので先にキャンプ場に戻っててくれるっすか？」

「わかった 何かあれば連絡してくれな」

「はいっす では」

そう言うと志野っちは、また森の中へ入って行った…森の中で何かしたいことがあるんだろうか？

「ねえねえ川で少し遊んでこうよ！」

「ああいいぞ オレは少し休憩だ」

さすがの辰則も疲れが出てきているみたいだ オレも普段こんなに歩かないから体が答える

「オレも休むわ 2人で遊んでいいぞ」

「まったく男子はだらしないわね 行こ花恋っ」

「うん！」

「女どもは元気がいいな」

「そうだな　と言ってもさっきまで寝てたからじゃねーか？」

「それもそうだな　今度はオレたちが寝るとするか」

「やっぱ辰則もさすがに疲れて来たのか？」

「そりゃあれだけ働けば疲れるわな」

「そりゃそうだな　ここで元気だったら逆に怖いぐらいだ」

「もうダメだ　お休みい」

「お休み」

そういうとすぐに辰則は眠った　オレも寝るとしよう　2人はほつておいても大丈夫だろうから少し寝させてもらうぞ

「……て」

なんだ？

「……起きて」

この感じはどこかで聞いたような　まさかあいつ……

「起きろ——っ！！！」

突然の大声にオレは飛び起きた

「な、なんだなんだ？！？！」

「やっと起きてくれたね」

「ったくいつまで寝てんのよ」

目を覚ますとモミジと五十嵐がオレを起こしに来ていた　どうやらアイツではなかったみたいだ

「ああ悪い寝ちまったか……」

「まったく起こしても起きないんだから死んだんじゃないか心配したじゃない　1%だけ」

「……っ！　今何時だ？」

「もう夕方の4時だよ？」

「ヤベっ……そろそろ帰んねーとな　辰則起きろ」

あれだけの大声ですら目覚めない辰則を叩き起した

「……んだよ人が気持ちよく寝てるってのに……あ……」

「ところで志野はどうしたの？」

「志野っちならまた森に入って行っただぞ 何かやることがあるとかで」

「先にキャンプ場に戻っててくれって言われてたんだ」

「それじゃあ急いで帰りましょ 志野が待ってるかもしれないし」

「そうだな」

まだ軽く寝ぼけたままオレと辰則は起き上がって、キャンプ場に戻ることにした

「あれ？ まだ帰ってきてないわね」

キャンプ場に戻ると、そこには志野っちの姿はなかった

「まだ森に入ってるのか？」

「一応携帯で連絡してみるわ」

何かあれば連絡するように伝えたが、もしかしたらケガで電話がでないのかもしれないと少しあせりをみせながら携帯を取り出した
「…………あ、もしもし志野っち？」

よかった、電話は繋がった

「あ、ドラさんどうしたっすか？」

「どうしたってまだ帰ってきてないから心配になって電話したんだよ 大丈夫か？」

「おいらは大丈夫っすよ すいやせんもう少しで帰るんで」

「そっかわかった 気をつけてな」

「はいっす！」

「志野っち、もう少しやることがあるみたいだって」

「よかった ケガとかじゃないのね」

「それじゃあ志野君が帰ってくるまでに晩ご飯作ってあげようよ きっと疲れて帰ってくるから」

「そうするか で、晩飯はカレーでいいか？」

「まあ定番中の定番だからな オレはそれでいいぞ」

この時は昨日もカレーだったのを完全に忘れていた

「あたしもいいわよ カレー好きだし」

「私もそれでいいよ！」

「じゃあカレーで決まりだな　また材料買ってこないといけないから今度は昼とは逆の作業係にしよう」

「てことは、オレと五十嵐が食材係ってことか」

「ああそう言うことだ、場所は窓口の近くに店があるから適当に買ってきてくれ」

「わかった　それじゃ行こうか五十嵐」

「はい　行ってきまーす！」

「じゃオレとモミジでカレーの土台作りするか」

オレと五十嵐は食材を買いに、窓口の方へと歩いて行った

「あつたあつた、あそこだな」

最初来た時は視界に入っていなかったが意外とデカイ店があった

「おおすげー食材あるじゃん　オレはカゴ持つから食材選んでくれるか？」

店内に入るとキャンプの定番のカレーの具材やバーベキューの具材、他にもいろんなものが揃っていた

「りょーかいでーす！」

カレーの食材ってたしか玉ねぎにじゃがいもににんじんに：あと肉とルーか

おっと米を忘れちゃいけねーな　いつもレトルトだから記憶があいまいだな

「これにこれにこれでしょ　あとこれだね」

手際のいい五十嵐はどんどん食材を入れていく　さすがは女の子、料理は得意なんだ

「あとこれだね」

五十嵐が最後にとったのはオレの思っていた食材ではなかった

「これってコーヒーの粉？」

「そっ！　これは隠し味なのだー」

「へえ隠し味も知ってるのか」

「うちではいつもこれ入れてるんだ！　よしっこれで全部だよ」

「じゃあ会計してくるか」

「うん！」

食材を選び終わりレジの方へを向かっていくと、あるものが目に入った

「なあ五十嵐、これも買ってかないか？」

「いいね！ 買ってこ買ってこ！ あ、でもみんなには内緒にしとこうよ」

「お、それいいなサプライズに出してやるか」

「うん！ みんな喜んでくれるよ」

最後に「ある物」を買ってキャンプ場に戻った

キャンプ場に戻ると、辰則とモミジがちゃんとカレーの土台とハンゴウ用の土台も完成していた

「ただいまー そっちもできたみたいだな」

「おーおつかい御苦労だったな なかなかいい感じのが出来たぞ」とは言っても既に土台のレンガは組み立てられているから、実際はアミの用意とかだけなんだが

「そっちもご苦労さん さっそく作ってこうか」

「料理はあたしと花恋に任せて あんたたちはご飯お願いね」

さすがは女子 料理のことは手際よく進めてくれる ここはおとなしく言うことを聞いていくのが先決だな

「じゃあご飯作るか辰則」

「おうよ ハンゴウならオレに任せろ！」

こっちも頼りになる奴がいてくれて助かる てかオレすることなくね？

「花恋野菜切るのうまいわね」

「楓ちゃんだって私より全然上手だよ！」

「うおーもつとだもつと火よ燃え盛れ！！ 半端な覚悟じゃ半端な飯しかできんぞ！！」

一番燃え盛ってるのはお前だとツツコミたくなった…

「なあ辰則、オレは何すればいい？」

「よし龍二もこの火を熱くしろ！」

「よっしゃ任せろ！」

「「うおー熱くなれ！　もっと熱くなれ——っ！！」」

ヒグラシの鳴き声にも負けずに叫び続けた……

「さあてこっちは完成したわよ　そっちはどう？」

「で、できた……ぞ……くっ……」

「ご飯如きで何のダメーじ喰らってるのよ」

「今回の敵は予想以上な強さだった　去年の時は簡単に勝てたと言うのに……」

「そりゃ蓋してなかったから煮えるものも煮えないわよ……」

「「しまった！！」」

「あんたたちバカに任せるんじゃないわ」

「でも、できたからいいじゃない！」

「「そーだそーだ！」」

「まったく今日は花恋に助けられっぱなしじゃないの」

「「面目ない……」」

「みなさんお待たせっす　遅れてすいやせんね」

くだらないコントをしていると、ちょうど志野っちが帰ってきた
ナイスタイミングに帰って来たもんだ

「あ、もうご飯できてたんすか　手伝えなくて申し訳ない」

「いいのよ　それより用事は済ませてきたの？」

「もうバッチリっす　いいところ見つけたっす！」

「そ、ならよかった　じゃみんな揃ったし食べましようか」

「「「はーい」」」」

ようやく晩飯が食べれる　モミジたちが作ったカレーを見るといかにも美味しそうなにおいと色をしている　これは期待できるぞ

「それじゃ皿によそっていくから各自持ってきて」

オレたちの作った少し硬そうなご飯を盛りつけ、その上に美味しそ

うな…いや美味しいカレーを乗せた

「それじゃあ席について」

「「「「いただきます！」「」「」」」

「おおこのカレー美味しいぞ！」

辰則が言う通り、かなり美味しいカレーだった

「これってコーヒー入れたんだよな？　こんなにも美味くなるものなんだ」

「隠し味って結構、味に深みがでるんだ　家によってはまた違う物入れるらしいよ」

オレはいつもカレーなんて適当に作ってたから、こんな隠し味なんてまったく興味を持ってなかったが、今度作ってみるとしよう

「おいらお腹ぺこぺこで帰ってきたから　どんどん食が進むっす！」

「志野っちは今日１日中動き回ってたからな　そりゃ腹も減るだろう」

今日１日のことを話しながら晩飯を食べ終えた

「「「「「ごちそうさまでした」「」「」」」」

「さて、飯も食ったし……」

「「これで遊ぼうぜ！」」

オレと辰則の声がまたかぶった

「「って…え？」」

オレと辰則が出したのは、「花火」だった

オレと五十嵐が晩飯の食材を買いに行ったときに、レジに行く途中でみつけたのは「花火」だった

食後にサプライズで喜ばせようと思っていたのだが…

「まさか辰則たちも花火買ってたのか？！」

「そう言う龍二たちも花火買ってたのかよ！」

「なんだ、サプライズで喜ばせようとしたのに、どっちも同じこと考えてたなんてな！　ある意味サプライズだわ」

「まったくだ　タイミングを計って出したつもりだったってのに、考えることが同じだったとはな　こりゃ一本取られたわ」

「でも、楽しみが2倍になってよかったじゃない！　早く花火やりますよ！」

「やろやろー花火楽しみにしてたんだー」

予想外な展開だったけど、たしかに2倍の楽しみができてよかった

「オレ、バケツとか借りてくるから洗い物だけ頼むわ」

皿洗いが嫌なんだろう、バケツを借りてくると言って逃げて行った
「あいつ逃げたわね」

モミジにも気付かれていた

「まあまあこれぐらい許してやろうって」

あとで怒られないように、ここでモミジの怒りを鎮めることにした

「武田君、今日は頑張ってくれたんだしいいじゃん！」

「……そうね　なんだかんだで結構作業頑張ってくれたんだし許してあげるわ」

…辰則、この恩は後で返してもらおうぞ

「こやつらをちゃっちゃと洗っちまおうですぜ！」

オレたちは5人分の皿を4人で片づけた…案外簡単に終わった

「後片付けも終わったし　後は辰則がバケツとライター持ってくるまでまってようか」

少ししてから辰則は帰ってきた

「遅っそーい！！」

モミジはキレた　せっかく怒りを鎮めたってのに

「はは悪いな　遅くなったか？」

「バケツ如きでどんだけ待たせるのよ！」

実際にはほんの少しなんだが、怒りで時間がわからなくなっている
みたいだ

「だから悪いって　ほら花火やろうぜ」

「ほらほら楓ちゃん、花火用意しよ！」

「…って辰則、バケツどこ持ってくんだ？」

辰則はなぜか、広場の見える方にバケツを置いた

「花火はここでやろう」

場所なんて特に関係ないのに、何かこだわりがあるのだろうか

「この方が風が当って気持ちいいからな」

「なんだそれ、風ったってあんまかわんねーぞ？」

「いいからいいから、ここでしようぜ」

何か企んでいるのか？ どうしてもそこにしたいらしい

「わかった ここで花火しようか」

「じゃあ最初は女子が花火選んでいいぞ」

「ホント！？ 花恋どれにする？」

「やっぱり最初は普通の花火でしょ 楓ちゃん！」

「そうね っ！ あーっしまった！」

「どうしたの？」

「花火するなら浴衣着たかったな」

「そうだね」

「さすがに浴衣は貸し出してなかったな 基本はキャンプだからな
今回は諦めとけな」

「ちえ」

「それじゃあ今度、一緒に浴衣で花火しようよ 楓ちゃん」

「いつする？！ 明日？」

「うーん明日は疲れてるから 明後日にしようよ！」

「いいわよ！ 楽しみだわ」

女子の会話からおいてけぼりのオレたち3人は3人で花火を楽しんでいた

「おっ！ でたネズミ花火」

「ヘビのもあるっすよ！」

「ロケットもあるな…でもこれはここでは止めとくか」

「ああゴミが見つからないといけないしな よくマナーを考えてる
じゃん 龍二」

「さすがに自分じゃないから気をつけてるだけだって」
そんなくだらない話をオレたちはしていた

その時だった

「ドーン：ドーン：ドドーン」

突然腹に響く大きな爆音が聞こえた

「わぁー花火だよ！」

音の聞こえる方をみると広場のさらに向こう側から大きな打ち上げ花火が上がっていた

「辰則、もしかしてこれを狙ってたのか？」

なぜこの場所で花火をしようと言いだしたのか、ようやくわかった
「どうだ凄いだろ？」

まるで自分が用意したかのように自慢げに答える辰則　もちろんこれは辰則が準備したサプライズではない

「実はなさっきバケツを借りに行ったときに張りがみ……」

「あんた凄いじゃない！　こんなサプライズを用意してたなんて！」

「武田君凄いね！　でもこれ用意するの高かったんじゃない？」

「いやあの……」

女子たちは完全に辰則によるサプライズだと思っている　辰則は、まさか本気で勘違いするとは思ってなかったみたいな顔をしている
「まあいいじゃん　結構感動してるみたいだしさ」

「そうか？　後でどやされないか心配だが……」

「大丈夫だって　今まで怒ってたのをチャラにできるんだから、ここは黙っとけて」

「それもそうだな」

オレたちの話なんぞ聞こえていない2人は打ち上げ花火を堪能していた

ちなみに志野っちはへび花火で遊んでいた　あれ氣にいったのか？

打ち上げ花火も終わり、オレたちの買ってきた花火もほとんど消化した

「さて、そろそろ終わろうか」

オレは切り上げるように終わりを告げた

「まだこいつが最後に残ってるぞ」

もう終わりかと思っっているところで、辰則が取りだしたのは「線香花火」だった

忘れてはならない花火の絞めを忘れていた

「じゃあこれ最後にしようか」

切り上げようとしたオレは急遽、ロスタイムを設けた

「線香花火すると何だか全てが終わる感じがするわよね」

何気なくモミジが発した言葉に何か重くのしかかってくるような錯覚が起きた

「…全て終わるかあ」

無意識に声が出てしまった

「なによ狩野 えらく考えこんじゃって、別に何もかも終わるわけじゃないでしょうに」

「そうっすよドラさん またみんなでこればいいじゃないっすか！」

「志野君の言う通りだよ 2学期になればまた毎日会えるし寂しくないよ！」

自分にしかわからないこのプレッシャーは、他のみんなにはわからない けど必死で助けてくれる気がしてオレは少し泣きそうになっってしまった

「泣くな龍二っ！ 何か自分で抱えていることがあるんなら、オレたちは全力で助けてやる だから一人で抱え込むんじゃない！」

辰則の元気ある声でオレは何か勇気をもらえた気がした

「ありがとな そうだよなまたみんなと学校で会えるのに何でオレってば落ち込んでんだろーな きっとこの線香花火みてたからだな

えーいもっと燃え盛れこの線香花火め！」

やけくそになったオレは線香花火を3本同時につけた

「あ——っ！ 狩野あんたズルイわよ！ あたしだって3本使うんだから」

いっきに3本をみんなで使ってしまったせいで、すぐなくなって最後の1本になった

「これで最後だね…」

「最後は狩野 あんたが持ちなさい」

「え？」

「何考えてんのかしらないけど、今日1日見てて、あんたは何か違う景色を見てた だからこの最後の1本と共に降ろせるだけの重荷をここで落とさない わかった？」

「ああありがとな」

元気にしているつもりでも、顔に出ていたようでバレバレだった
やっぱりモミジは人の考えてる事が分かるのかもしれない

そして最後の1本を点けた

「……オレさ、こうやってみんなで1日中遊べてスゲー楽しかったよ まだよくわかんねーけどこの楽しみが最後になるんじゃないかと心配でさ、悔いのない日にしたかったんだ」

「だから今日は笑って過ごして行こうと考えてたんだけど、バレバレだったみたいだな」

「でもモミジに言われて分かったんだ オレは一人で荷物を持ちすぎたんだって こうしてみんなに話したら何か軽くなったわ ありがとな、みんな」

話し終わると同時に重荷と共に線香花火は落ちていった：

「どう？ 荷物は落としてこれた？」

「ああずいぶん軽くなったよ 悪いなみんな最後の花火、オレ用に使っちゃった」

「安心せい オレたちもこれでお前のことがわかったんだからオレたちの花火でもあったんだ」

「そうっすね ようやくいつものドラさんに戻ったっす」

「うんうん！ よかったよかった！」

「みんな……」

オレが考えこんでいたことはモミジだけじゃなくみんなも分かっていたみたいだ

なんだ結局隠しきれてないじゃんか オレって演技が下手なんだと

確信したわ

「ホント 最初からこうしてればよかったものを 余計な心配して
疲れたわ さあ寝ましよう」

ずっと気をつかってくれていたモミジはだいぶ疲れていたようだ
こればかりは文句はいいいないな

「私ももう寝るねえ また明日っ！ お休みい」

「五十嵐もありがとな お休み」

「おいらも今日は働きすぎたので休むっす ドラさんも早く寝て明
日頑張りましよう！」

「おう志野っちのサンキューな」

「オレはもう少し起きているとするか」

辰則はまだ寝ずに夜更かしするみたいだ

「お前大丈夫なのか？ 今日1日働きっぱなしだぞ？」

「大丈夫だ オレは体力だけは人一倍だからな はっはっは」

「……オレももう少しだけ起きてようかな」

「おうおう少し心の方も休ませてやれ」

「ああ……」

みんなが寝静まった頃、オレと辰則は火番をしていた と言っても
焚火があるわけでもなく、ただの夜更かしをしていた

「なあ辰則……」

「ん？ なんだ」

「もし自分の理想の世界に行ってそこで生きていけるとしたらどう
する？」

「何だそりゃ 心理テストでもしようってか？」

「いや特に無いんだが、もしそんなことが出来たらお前だったらど
うするかなーって」

「……そうだな オレは遊び半分で行けるのなら行きたいな だけ
どそこでいつまでも居るのは嫌だな」

「なんでだ？」

「理想なんて目標みたいなもんだろ？ オレは野球をやっているも何か目標を目指してやっている だけどその目標がすぐに手に入ってしまうなんて面白くもないだろ」

「だからオレは遊びとしてなら行きたいと思うってことだ」

「なるほどなー 理想は目標か……」

「辰則にしては、良いこと言うじゃんか」

「何をお？！ オレだって名言の一つぐらい持ってるっつーの」

「そっか 何かコブがとれた感じだ サンキューな」

「？？ 何だ気色悪いぞ…変なキノコでも食ったか？」

「ははっ 大丈夫だって 間違っても辰則を襲ったりしねーから」

「そうか、なら安心できるが」

「さてもう寝るか 今日早く起きて眠いわ」

「そうだなオレも流石に自主練やりすぎたみたいだ眠い」

「んじゃそろそろテントに戻るか」

「ああ」

「それはおいらの虫っすよー」

志野っちは寝言まで虫だった…

「志野っちの虫好きには、逆に憧れるよ 何事にも真っ直ぐな思いが伝わってくるな」

「つーか虫カゴだらけでオレらの寝場所がないぞ…」

「しゃーないだろ虫は荷物じゃないって言うんだから オレらは隅っこの方で寝るか」

「そうだな」

8月30日 朝5時

「みんな起きるですよー！」

朝から大声で呼ぶのは誰だ？

「ほら、たっつんにドラさん、早く早く！」

起こしてきたのは志野っちだった なんて早起きなんだよ

「早く起きるっす 早くしないと遅れるですよ？」

「何に遅れるんだよお？」

「決まってるじゃないっすか！ 虫取りっすよ！ ドラさん約束したでしょ？」

「虫取りって…今5時だぞ?!」

時計をみると朝の5時だった 昨日遅くまで起きていたからまだ眠い

「ほらー早くするっすよ」

「わかった わかったって ちょっと着替えてくるわ」

「急ぐっすよお」

まさかこんな早くに虫取りに行くなんて、だったら昨日は夜更かしするんじゃないかったなあ

「志野っちお待たせ んじゃ行こうか…って皆も行くのか？」

「もう志野 何であたしたちまで虫取り行かないといけないのよー」

「皆で行く方が楽しいっすからね」

「しゅっぱーっ！」

出発の掛け声は意外にも志野っちじゃなく五十嵐だった ホント何でも興味を持つんだな五十嵐は…

「おい辰則大丈夫か？」

ふらふらになりながら歩く辰則があまりにも可哀そうだった

さすがに自主練が答えてるみたいだな…って歩きながら寝てるし

「……よっしゃー1点差だー……」

夢見てるし…しかもこいつは寝言まで野球かよ

「さあもうすぐ着くっすよ」

志野っちが指さしたところには大きなクヌギの木があった、そこにはたくさん蜜がでて虫が寄ってたかって蜜を取り合っている

どうやら昨日の昼にどこか行ったのは、この場所を見つるためだったんだな

「へえーすげーなこりゃ よく見つけたな志野っち」

「昨日偶然見つけたんでい！ この蜜はおいら特製の蜜なんすよ！」
さすがは虫取り名人、もしかすると必然的に見つかるように神様で

もいたりしてな

「いや——っ!!」

少し離れたところから突然叫び声が聞こえた このよく通る声はモミジか コーラス部だから分かりやすい大声

「どうしたモミジ! 大丈夫か!」

オレは声のする方に走って行くと、モミジが小さく丸まっていた

「おいモミジどうしたんだ ケガでもしたのか?」

「……………」

返事が返ってこない、もしかしてハチにでも刺されたのか? 怪我したのか? 救急箱が必要だ、病院に連れていかないと……そう色々考えているとモミジが指さした

「ん? なんだ」

指さす方を見ると、うじゃうじゃと動く黒い生き物がいた

「こ、これは…」

「うお——っ!」

思わず叫んだ こいつはスゲー!

「モミジ、龍二大丈夫か!!」

「カエデ嬢にドラさんどうしたんっすか!」

遅れて2人がオレたちのところに来た ちなみに志野っちがモミジを「カエデ嬢」と呼ぶのは、オレと辰則がモミジに怒られていた時偶然志野っちが見て、モミジには逆らわないと言う意味でお嬢の名が付いている

「志野っち、あれ見てみろ!」

オレはその光景を指さした

「こ、これは…」

「おおこいつあスゲーな」

オレが指さしたところには、数えきれないほどのカブトやクワガタが蜜の取り合いをしていた

「おいらこんな光景今まで見たことないっす! 感激だ!」

「礼ならモミジにいいな ここを見つけたのはモミジだから」

「さっきの悲鳴はこれを見たからか…まったくビックリさせんなよな」
「あ、あんたねこんなの何もしらずに見たら驚くに決まってるでしょうが！！」
しかもこの黒い光がもうあれに見えて余計にビックリしたのよ！」

黒い光…言わずともあれなんだろう…まあそりゃオレでもビビるだろうな

モミジにケガもなく安心したオレはあたりを見渡した

「おいそう言えば五十嵐は？」

「あれ？ さっきまで一緒に居たんだが モミジの悲鳴で駆けつけた時離れちゃったのか…」

「ちよっと大丈夫なの？ 今、花恋1人じゃない…」

「急いで探そう 志野っちとモミジはここで待っていてくれ 何かあればモミジが叫んでくれ」

慌ててオレと辰則は五十嵐を探しに行った

「おーい五十嵐ーっ！」

「どこだ返事しろーっ！」

「おーいどこだーっ！」

「おーい何してるの？」

「おーいどこだーっ！ ってあれ？」

「狩野君に武田君、誰か探してるの？」

「五十嵐っ？！」

「うん私、五十嵐 花恋だよ？」

「五十嵐！ 良かった無事だったか！」

モミジが居たところからそれほど遠くないところに五十嵐はいた

「どうしたのそんなに慌てて」

「どうしたのって五十嵐がいなくなって心配で探してたんだぞ」

「そうだったの？！ ゴメンつい夢中で…いつの間にかみんなどこか行っちゃったから1人で虫取りしてたんだ」

「え？ な、なあ五十嵐…モミジの声聞こえなかったのか？」

「え？ 楓ちゃんの声？ うーん聞こえたような聞こえなかったよ

うな」

「私って夢中になると周りの音が聞こえなくなるんだよねー　はははっ」

マジか…あの声が聞こえないなんて、凄い集中力だな

「ったくそうだったのか…事故にでもあったんじゃないかって心配したんだぞ」

「ゴメンね　私ったらそんなことになってるとは知らなくて…」

「まあいいじゃんか　五十嵐もモミジも無事だったんだし　な？」

五十嵐も何もなく安心して

「それもそうだな　よし皆のところに行こうか」

「うん！」

「おい志野っち、モミジーっ！」

「あっ！　ドラさん」

「花恋っ！　よかった無事だったのね…ホントよかった」

「みんなゴメンね　私のせいで皆に心配かけちゃって反省してます」

「もういいってこうして皆無事だったんだしな」

「それより志野っち、あの大量のカブトたち取ろうぜ！」

さっき見つけたカブト虫たちを早く捕まえたいと言わんばかりの顔をしている

「そうっすね！　戻ってくるまで待ってたんすから！」

「よっしゃ取りまくるぞーっ！」

「んーカブトとノコギリクワガタにミヤマにヒラタか…まあ大体の種類が取れたな　だけど本命のオオクワガタは取れずかあ　さすがに難易度高いな」

たくさんの種類が見つかっただけでも凄いが残念ながら本命は見つからなかった

「そうっすねー　オオクワガタは稀少種ですからね　そう簡単には取れんですよ」

「あっ花恋も虫取ってきたんだ見せて見せて！」

この二人は虫が怖くないのか…だいたい女子って虫嫌いだと思った

んだがな

「てかモミジ、虫大丈夫なのか？ さっきはあんなに騒いでたのに」
「あれは光景にビックリしただけよ 虫自体は昔っから弟と一緒に取りに行ってたから平気なのよ あれ以外はね……」
「何が言いたいかはよくわかったよ なるほどな弟のおかげで虫に耐性がついたのか」

「五十嵐も虫大丈夫なんだな」

「んん大丈夫じゃないよー だって虫苦手だもんっ！」

「「「ええ——っ！」」」

「いやでもさっき虫触ってたじゃん それにカゴにもいっぱい居るし」

まさか虫が苦手なのに触っていたと言うのか…何でも挑戦しすぎだろ五十嵐よ…

「どんなことでも挑戦したいからね 何でも来なさいよ！」

「あたしも知らなかったわ 花恋が虫嫌い何て…」

「そう言えばレンさんはどんな虫捕まえたっすか？」

「んーとよくわかんないんだけど すっごく黒い虫が取れたよ」

その瞬間、モミジの表情が変わった

黒い虫から連想されると言えば…まさか……

「こ、これは…っ」

「いや——っ！」

モミジは逃げて行った……頼むから遭難するなよ…

「オオクワガタだ——っ！ ドラさん見てくだせいオオクワっすよ！」

「マジか!？」

予想外の展開に驚いた

「うあスゲーホントにオオクワガタじゃん」

改めてみるとたしかに独特の大きさと黒いツヤが特徴なのはオオクワガタだった

「五十嵐スゲーな こんな取ってくるなんて」

「やったすねドラさん！」

「ああオレたちの目標達成できたんだな志野っち！」

最初は無理に近いと思って期待はしてなかったから、期待を裏切ってくれて、あまりにも嬉しかった

「何だかわからねーがよかったじゃねーか！」

辰則はオレたちがオオクワガタが目標だったとは知らないから、何があだかわかっていないが、一緒に喜んでくれた

「そろそろ日が昇りきるから虫も取れないだろ テントに戻ろうぜ」
いつの間にか日が完全に登り切っていた

「ああでも先にモミジを連れ戻しに行かないとな…」

「そういやそうだったな……」

近くのあたりを探していると、案外簡単に見つかった

「大丈夫かモミジ？」

「ちよっとこないでよ——っ！」

「大丈夫だって 五十嵐が取ってきたのはオオクワガタだったんだよ」

「へ？」

表示抜けたかのような表情を浮かべるモミジ でもまあ最初はそう思うだろうな

「ほら見てみろよ」

「ホントにあれじゃないの？」

「ああ大丈夫だ 五十嵐、見せてやってくれるか」

「うん！ ほらこれだよ楓ちゃん」

「ううっ：あっホントだ もうビックリさせないでよね」

恐る恐るも確認出来たとたん素のモミジになった

「落ち着いたかモミジ？」

「うん もう大丈夫よ」

「そんじゃそろそろテント戻るから行くぞ」

辰則の合図で虫取りは終了になった

「」「はーい」「」

「……さて飯も食ったし、今日は何しようか？」

今日の朝ごはんは店にあったものと、キャンプに来る前に買ったお菓子などで腹を満たした

「そうね 昨日見たいに夜まで遊べないから また川で遊ぶのはどう？」

「今日は夕方には帰らないとバスがねーだろうからそれでいいだろ」「てなわけで川に行くことにしようか」

「今日は魚用のアミを持っていくつすよ！」

「そういや昨日川に行った時に魚がいたんだったな」

「昨日は虫取りアミしかなかったすから今日は魚取りに専念するっすよ！」

「時間もないし さっそく行こうか」

「「「「おう」」」」

昨日森を通った進路で進むつもりで行ったが、途中で看板をみつけた

「川原はこちらから行けます」

そう看板に書いてある

「「この看板に川原の道が書いてあるぞ」

看板の地図を見ると意外にも近くに川があるようだ 昨日の森のルートは裏側もしくはアウトコースを通って偶然川に出たんだな

「ほおこんな道からでも行けるのか これだと時間がかからず行けそうだな」

「よし これにそって進もう！」

「「「「おう」」」」

メンバーを完全にまとめあげようになった辰則、昨日今日でもうここまでまとめれるとはな、リーダーにしてよかった

少し歩いたところで、見覚えのある川が見えてきた

「あったあった川だ」

「さっそく捕まえるっすよ！」

「わーい捕まえよう！」

川原に着くなり川の中に入って行った志野っちとモミジと五十嵐ってまた五十嵐：何でも行動派だな

「オレまた眠くなってき……」

辰則は最後まで言葉を言い終わる前に寝た……

眠くはないが、オレは座って見てるかな

「やった捕まえた！ 志野、カゴカゴ！」

「あのそれがつすね……」

「あれ？ 志野っち魚用のカゴはないのか？」

何やら慌てる志野っちをみると魚のカゴがなかった

「そうなんす まさか魚が取れるとは思ってなくてアミだけ持ってきたんすよお」

アミだけ持ってくるなんて志野っちらしからぬ気がするなあ 虫に気が集中してたのか

「そうなんだーじゃあこの魚逃がしてあげましょ」

「うん バイバイ」

五十嵐は魚に手を振って逃がした

途中で昼ごはんを川原で食べ、さらに少しだけ遊んでいたそんなこんなで、そろそろ良い時間帯になった

「おーいそろそろ帰るぞ！」

「辰則も起きろ バス乗り遅れるぞ」

「ん……もうそんな時間か？」

「場所が近いから結構ギリギリまで遊んでたんだけどな」

「ほら急いで戻るぞ」

「「「はい」」」

まだ遊び足りないようだったがこれ以上遊んでいてはキリがない急いでキャンプ場に戻り帰りの準備を始めた

「そろそろ行くぞー」

「えーもう帰るのー？」

「これ以上だと今日のバスがないからな ほら急いだ急いだっ」

さっきまで寝ぼけていた辰則がようやくリーダーの力を発揮し始めた

「あれ？ 志野っち虫逃がすのか？」

みんなが帰る準備をいている時に、志野っちは虫カゴを開け捕まえた虫を逃がしていた

「おいらは虫を取るのが好きなんすよ 飼うのは苦手なんでここでお別れするっす」

「そっか 虫たちもこのほうが幸せだろうしな」

もしかして魚も持って帰らないから最初からカゴを持ってこなかったのか…

「それじゃ私も逃がしちゃえー！」

「ああオオクワガタがっ！」

「ドラさんいいんすよ 別に飼うために取ってるんじゃないんすからこれでいいんすよ！」

「志野っち お前はいつか虫から恩返しでもされるかもな」

「そうかもな 飼うことに責任を持たずに飼う奴だっているのに、志野っちはちゃんと虫のことを思って逃がしてるんだからな」

「へへへっ そうだとうれしいっすね！ 自分だけ幸せになるなんてダメっすからね 虫たちもおいらに飼われるより自然で生きていく方が幸せっすから」

志野っちは思いやりの心があるんだな そっか…自分だけ幸せになるのはダメか…

「おーし皆帰る準備できたかー？」

「「「「はい」」」」

「んじゃ帰ろうか」

帰りのバスは心地よい揺れでみんな寝てしまった オレも凄く眠いけど、これが最後になってしまうかもしれない気がして無理して目に景色を焼き付けた

駅に着き皆を起こして電車に乗ると、また皆寝てしまった 今日朝が早かったからみんな寝不足なんだろう その間オレは明後日の「答え」をどうするか考えた

そういえばさっきも思ったけど、どうして「最後になるかもしれない

い」なんて思ったんだろ…この世界に居ると答えればいつまでもこいつらと一緒に居られるのに…

「もしかすると答えはもう……」

最初は突然すぎて頭が理解しきれなかったけど、こうしてリフレッシュしたら何だか頭がスッキリした感じがする

この世界はオレが作った創造世界で、みんなオレが考えた人間何だと…ただの人形みたいな存在なんだと最初は思ってしまったいたけどそんなじゃなかった…みんなちゃんとそれぞれに意思があり考えがあり、笑ったり怒ったりいろんな表情を見せてくれたそれをみてオレは自分だけバカみたいだって思った　こんな楽しい毎日を過ごすことが出来てオレは本当に幸せだ　だけどそれはオレだけが幸せになったって意味がないんだ、明後日はそう簡単に「答え」を出すなんて出来そうにないだろう　今回のことは全てはアイツが決めることなんだ…

「シンの本当の意思を聞かないとな」

電車の座席が思いのほか気持ちよくオレはそのまま眠ってしまった

「……………」

またこれか…

「……起きろ」

ったくこの回想はデジャヴしすぎなんじゃねーか

「…起きろ龍二！　電車出ちまうぞ！」

ようやく起きたオレの耳に電車のベルが鳴り響く

「や、ヤバイっ！！」

なんとか現状を理解でき、ギリギリ降車できた　「駆け込み降車はお止め下さい」と言われそうなくらいだ

「はあはあ……悪いぜんぜん寝てるのに気がつかなかった」

「ったく家に帰るまでがキャンプだって先生に教わらなかったか？」

「遠足じゃあるめーし」

だがその通りだ最後の最後で失態をしてしまった

「少しここで休憩してこうよ　さっきので凄い疲れたでしょ？」

「ああでも大丈夫だよ　ありがとな五十嵐」

「その息切れ治ったら行くぞ」

慌てて電車を降りたためかなり息切れしているオレに気をつかってくれる辰則

「はあはあ：悪い：な」

上がった息を整えてから、駅を出た

辰則以外のみんな家は学校を通り過ぎるため、とりあえず学校で解散することになった

「こうやって地元に戻ってくると、もう少しでキャンプも終わりなんだって感じだな」

「またみんなで行けばいいじゃない　来年は3年だけど少しぐらい遊べるでしょう？」

「それもそうだな　つとオレそろそろ道変わるわ　学校まで行く前に家着いちまって悪いな　キャンプ楽しませてもらったよ　次は海にでも行こうじゃなか」

「また学校で会いましょう、たつつん！」

「またね」

「バイバーイ」

「オレも楽しかったよ辰則、今回お前にいろいろ教えてもらった気がするから礼を言っとくよ　ありがとな」

「なんだなんだ気持ち悪い　そんなの止めるよなまったく」

「ははっ　ま、気にすんな」

「そんなじゃ　さいなら」

そう言って辰則と別れた

また歩きはじめたオレたち

みんな疲れていて、特に会話も弾まずただひたすら歩いていた

「ねえまだ学校着かないの？」

「ここまで来たらもう少しだ頑張れ」

「おいらも疲れたっすよ」

「ほらファイトだよ志野君！」

弱り切った志野っちを後ろから押す五十嵐 五十嵐は疲れてないのかな？

「レンさんありがとうっす」

「ガンバレガンバレー！」

「……狩野ちよつと来なさい」

このタイミングはもしましや：

「押して」

やっぱりか：

「はいはい」

予想通りの展開にまったく驚きもしなかった

そう思いながらモミジのもとへと歩いて行った

「ほら、もう少しだからあんたも頑張るなさい」

これは予想外の展開でかなり驚いた

「お、おいモミジ オレが押すんじゃねーのかよ？」

「花恋が押してるのにあたしが押さないでどうするのよ」

「いやでもよ……」

「あたしが押しちゃ悪いっての？」

「そうじゃないんだ、モミジだって疲れてるだろ なのにどうして」

「疲れてんのはあんたでしょ さっきから涙みたいに汗かいてシ

ヤキッと前みなさい」

「ぐっ……」

さっき辰則と別れてから、1人の友達と別れてしまふんじゃないか
と思っでしまい、顔に悲しみが出ていた

「もう：あたしたちに言えないことが何だか知らないけど、自分で
考え過ぎよ この前学校の帰りに言っただでしょ もしあんたが自分
を責めているのならあたしがガツンて言ってあげるって」

「まったくモミジには叶わねーな」

「なんだか2人、夫婦みたいだね」

「な、何言っでんのよ花恋っ！」

「楓ちゃん……狩野君飛んでっちゃったよ？」

「へ？」

クソお何でこんな目に：ある意味ガツンって言ったわ 五十嵐も余計なこと言っちゃダメだろ

「ここまで押してあげたんだから感謝してほしいものね」

「ありがとうございますモミジさん」

「レンさんありがとうございます もう大丈夫っすよ」

「あ、志野君生き返ったみたいだね」

「さて、もう少しだ頑張ろう」

涙と言う名の汗を拭きもう少しのところを歩いて行く

またしばらく歩くとようやく学校が見えた

「やった！ 学校だわ」

クタクタに疲れたみんなは、ようやく学校にたどりついた

「ちよつと学校で休憩してきましょうよ」

「そうだな」

ちようど木で陰になっているところで腰を下ろした

「はぁー疲れたぁ のど乾いたわね：狩野ジュース買って来てくれない？」

「わかった ジュース、みんな何飲みたい？」

「あたしリンゴジュース」

「私はオレンジがいいな」

「おいらはオロナミンCっす おいらも手伝うっすよ」

「いいのよ志野 狩野だけで十分だから」

「ホントにいいの狩野君？」

「ああ大丈夫だ じゃちよつと待っててくれ ……ありがとな……」

モミジにだけ聞こえる声で礼をいい 注文を覚えオレが自販機のところ歩いて行く

人気のない校舎に行き、オレはなぜか感情が抑えきれずガマンしてきた涙がこらえきれなくなり汗とともに流れた……

「クソっ…何で涙が出てきちゃうんだよ……」

この悲しみはいったいなんなんだろう：オレには人生の選択が2つもあってこっちで生きて行くならこんな悲しまないはずなのにどうしちまったんだオレの心は：

「お待たせー 買って来たぞ」

「遅っそーい ジュース買うだけでどんだけ時間かかってるのよ」

「悪い悪い リンゴジュースが裏門にしかなくてさ でも当たりがでたんだよ ほら」

そう言っつてモミジにジュースを2本渡した

「サンキュー：つてリンゴ2本はないでしょ：これはあんたにあげるわ 水分取りなさいよ、さっきあれだけ汗出してたんだから」

「ああわかってるって」

モミジには感謝しないとな あそこでオレを1人にしてくれなかったらヤバかった

オレの感情が全てお見通しのようだな どうも隠しきれない：本当に心が読めるんじゃないのか？

「えっとオレンジは五十嵐だったな」

「うん！ ありがとう狩野君」

「そんでオロナミンCは志野っちと：」

「ありがとうっす！」

「オレはサイダーっと リンゴジュースもらってもいいのか？」

「うん！ 買ってきてくれたご褒美」

「お使いありがとうっす」

「ありがとな そんじゃ遠慮なくもらうわ」

「よーし飲もう」

のどが渴ききっていたみんなはグビグビと体に水分を補充していった
「「「生き返ったあ！」「」」

ジュースを飲み終えたオレたちは少しだけ木陰で休憩してから、別れることにした

「さて、そろそろ帰りましょ」

寝転がっていたモミジが起き上がり、帰ると言う

「そうだな もう少しで夜になっちゃうし、そろそろ帰らねーとな」
時刻は午後6時30分だった 夏とはいえ少し暗くなってきていた

「じゃあととりあえず校門まで行きましょ」

「ああ」

そう言ってみんなで校門まで歩いて行った

「狩野、何か絞めっばいこと言ってるよ」

「え？ オレがか？」

「だってリーダー帰っちゃったし 副リーダーが妥当でしょ」

オレっていつの間に副リーダーになってたんだ？

「副リーダーお声をちょうだい！」

「頑張るッす 副ドラさん！」

「おいおいそれじゃあオレは2番目のオレになっちゃうぞ志野っち」

「何でもいいから早く絞めなさい！」

「わかったよ 怖い奴だな…えーっと本日は無事に何事もなく非常に楽しいキャンプをすることができました それが出来たのもみんなが楽しく明るくしてくれたからだと思います 私事です今回のキャンプでみなさんから非常に意味のある言葉を貰った気がします
それをここでお礼の言葉を言います みなさん、ありがとうございます
います 以上」

「さっすがドラさん！ 絞めるところ絞めましたっすね」

「カッコイイよ狩野君！」

「いやゝありがとう ありがとう！」

「はいはいそれじゃお開きにしましょう」

「もう終わりっすかあ じゃあおいらからも一言、ドラさん虫取り楽しかったっすよ！ また誘ったら一緒に来てくれますかい？」

「ああもちろんだ 今度はもっと凄いの見つけような志野っち」

「あ、じゃあ私からも…えっと私をキャンプに誘ってくれたみんなに感謝します こんな経験は初めてだったからいろんなこと学べました ありがとう！」

「カエデ嬢も一言欲しいっす！」

「楓ちゃんも何か絞めて！」

「あたしも？ んー……狩野っ！」

「な、なんだ!？」

「あんたと遊べて楽しかったわ いろんな意味で」

「…それは奴隷的な意味で？」

「主にそうね よく働いてくれたわ ありがとう」

「いえいえどういたしまして」

「さ、帰るわよ あたしお腹すいちゃった」

「そうっすね それじゃみなさんさよならです！」

「みんなバイバーイ また学校で会おうねー」

全員別れを言い、自分の家の方向へ歩いて行った

「モミジ…」

「何よ？ まだ言いたらないっての？」

「今回のこと、ホント感謝している まさかオレの心が読まれてるとはな」

「別に心が見えるわけじゃないから ただいつもと違う顔だから変だと思っただけ」

「それでもいい 最後まで理由は言えなかったけど、少しだけ決心がついた気がするよ」

「そ、何だか知らないけどよかったじゃない 続きはまた学校で話しなさ……」

「ありがとな…楓」

「……………じゃあねまた学校で会いましょ」

「ああ…バイバイ」

最後モミジはこつちを振り向かず下を向いたまま帰って行った

「さてとオレも帰るかな…」

1人で帰る間、特に考えることもなくブーツとしてたらいつの間にか家に着いていた

「ただいまぁ」

誰もいない部屋に　むさ苦しい熱気が充満していた

「あ、暑い……」

灼熱と化したオレの部屋を窓を全開にし、風を送り込んだ

「やっと熱気が消えていったか　じゃあ晩飯作るかな」

野菜が腐らないように、熱気を取り払い晩飯を作り始めた

「うあ何もねーな」

残っていたのは買い置きしてあるレトルトカレーだった

「そう言えばコーヒー入れたら美味くなるんだったな　ちょっとやってみようかな」

おもむろにコーヒーを探し、カレーの中へと入れた

「いただきます！」

美味しいのはわかっているため、大きな1口でカレーを食べた

「………に、苦げ——っ!!」

「何でだ？　なんでこんなに苦いんだ?!」

たしかにコーヒーを入れてたはずなんだが…もしかして量なのか？

「よく考えたら隠し味なのに味を表に出してどうすんだよ…」

原因はすぐにわかった　ただたんに量が多すぎただけだった

「これじゃあ食えねーよお」

苦みと戦いながら、カレーをたいらげた

「ごっちそうさーんでした」

風呂の準備をしながら、皿洗いを始めた
しばらくすると風呂が沸いた

「ふう極楽極楽っ」

キャンプ場には風呂がなかったから、1日ぶりの風呂だった

風呂から上がると、時刻は午後10時だった

「いつもより早いけど、今日はもう寝ようかな」

布団に入り、少しだけ明日のことを考えていた

明日はどんな結果でどんな人生になるかわからないけど、たとえこの人生が最後だったとしてもこうして楽しく遊べてよかった
オレが作った友達だとしても普通の友達として接して行けてよかった

たと思う

辰則はいつも元気で体力自慢な友達で、志野っちは虫のことが大好きでよくオレを誘って虫取りにいった、五十嵐は清楚な感じだがとても活発で挑戦的な明るい女の子だ、そしてモミジ…いや楓は、オレのことを奴隷のように扱い虫を見る目だったけど、最後はオレのことを心配してくれた…普段は怖いけどオレの考えをお見通しで最後まで迷惑かけちゃったな オレには今までの本当の記憶がないけど、ほんの少しの間だけでこんなに楽しい思い出を記憶にすることができたんだ

8月29日と30日をオレは絶対忘れないようにしたいと思いつつ就寝した

8月31日

やはりいつものように暑い日差しとともにセミの鳴き声が聞こえて目覚ましよりも早く目覚めた ただ少しばかり秋の感じも出て来たのかセミの鳴き声に力がないように思えた

現在8月31日午前9時起床 今日はずいに決断の日だ

「今日か…最後の日は家でよく考えてどうするか決めよう」

そう思い考えこむと、意外と時計の進み具合が早く感じた

「あれ？ もう昼過ぎか…さっき考え始めたばかりだと思ってたな」

嫌なことは時間が経つのが遅いて感じるけど、こう言う時間切れまでが分かっていると嫌なことなのに時間が早く進む気がするな
時計は刻一刻と針が進む…

気がつけば夕方になって少し涼しくなって来たのか、これまでのことを整理できそうだな

ちょうどヒグラシも鳴いて心が落ち着いてきた

「たしかシンが来るのはリミットの10分前だったな」

「どちらかにするだけを答えるなら全然時間が余る だったらその時に少し話ができるといいが…」

最後の1日を使って今までのことを思い出し、オレは本物の世界がこの創造世界に残るかをじっくり考えていた おかげでこれまでの事やこれからの事を色々整理できた

「あとはアイツと会うだけだ…」

最後になるかもしれない夕食を秋の風にあたりながら食べた なんだけいつもと違って美味しく感じた
そして約束の時間が迫ってきた

あたりは寝静まり、虫の鳴き声がかすかに聞こえた

「そろそろ時間か…」

時計は23・50 と指していた

すると突然景色が変わった あのと真っ白な世界だ

「待たせたね」

世界が変わると同時にシンが現れた

「時間通りだな」

「もちろん さっそくだけで君の答えを教えてほしい」

「……おいおいいきなりかよ…お前と会うのはこれが最後なんだし、ちよっとオレの質問に答えてくれないか？」

これが最後の会話かもしれないのに、意外とオレの心は落ち着いていた

「…あまり時間がないから少なめにね」

「サンキューな えっと質問てのはな、ずっと疑問だったのが今いるこの世界はなんだ？ お前が現れると必ずここに来るが… ここで話すときシンはオレがいる世界のことは「あの世界」って言ってるからあそことはまた違う世界なんだろう？」

「…たしかに「あの世界」って言うてるのは、こことはまた違う世界だからだよ この世界は僕と君が唯一会話できる場所なんだ そうだね「契約の間」とでも呼んだらいいかな」

「契約の間…それがここの名前か」

「まあ名前は僕が勝手に付けただけだから特に深い理由はないけどね あと景色が真っ白なのは、僕と君以外はここに存在できないか

らなんだよ だからあまり気にすることはない」

「……そろそろいいかな？ 君の答えを教えてくださいかい」

「わかった……オレは……」

「本物の世界に戻らない オレは今いる世界に残る」

「……そっか それが君の決断だね」

「……と言いたいところだがちょっと待ってくれ、ホントはまだ決ま
ってないんだ だから少しオレの考えを話していいか？」

「考え？ 別にいいよ……」

「今から言うことはオレが勝手に解釈したことだが聞いてほしい」

「……うん わかった」

オレは今までの事を整理し、自分の考えをシンに話した

「最初に思ったのが何でオレがあの世界にいるのか考えたんだ 前
にシンはオレはお前から離れあの世界に逃げてきたんだと言ったよ
な」

「うん」

「だけどそんなことしても意味がないだろ？ 本体から離れた一部

の存在が創造する力なんてない、それ以前に生きていけるはずなん
てない 実際オレは創造してみようとしたけど何も出てこなかった」

「そこで思ったのが……オレが創造世界に逃げたんじゃない、シン……
お前が創造世界から逃げたんじゃないか？」

「……………」

「お前は本当のことを言うといいながら嘘をついていた」

「オレの意思で離れたと言っていたが、本当はお前がオレを離れた
んじゃないか？」

「……何でそう思うの？」

「オレが本当に逃げたんだったらお前はオレを無理やりにも素に
戻すはずだろ？」

「けどそうはせず逆に見守るかのようにオレにどちらの世界にす
るか慎重に選ばせた」

「今オレがやらされている人生の選択ってやつは、本当はお前が本

物の世界か創造世界のどちらに残るかを選択するはずだった」

「たぶん創造世界ってのはオレが作った世界じゃなくて、シンが作った世界だ　だからオレには創造することができなかった」

「お前はオレと同じように創造世界でどちらの世界で生きるかを決めていた　だけどその選択を考えることが嫌になって自分で決断しなかった」

「実際オレはこの選択が嫌で投げ出したいと思ってた　それはお前も同じ考えだったんじゃないかと…」

「だから代わりにオレを使い選択しようとさせた」

「……………」

「お前は真面目な性格なんだろう　自分の選択は間違っていないのか　本当にこれでいいのか…」

「そんなことを考えていたらわからなくなっって、誰か自分の代わりに言ってくれる奴が欲しかったんじゃないか？」

「人生の選択だ　そう言う考えも出てくるんじゃないかと思う」

「そこで創造の力か、何らかの力で自分と同じ性格では違った考えが生まれないから異なる意見を主張できる性格のオレを作り、どう答えを出すかを決めさせるために自分が今までいた創造世界にその世界の記憶をオレに入れて創造世界に落とし、同じ生活を送ってどちらの世界がいいのかを決めさせようとした」

「もちろんオレに本当の理由を隠したまま」

「そう……オレはお前に「答えを導くために作られた存在」だ」

「違うか……？」

「…………よくわかったね　でもどこでそれを理解したの？　それにどうして僕が真面目な性格だって言えるの？」

「お前が2度目の時オレに会いに来た時をよく思い出したら、オレが創造世界で生きてることに楽しいと感じ、気持ちが動いた時にお前が現れてオレを本物の世界に戻ってくるようにしようとした」

「最初は特に気にしていなかったが、よくよく考えると何であるのタ イミングで出て来たのか不思議だった」

「それで思ったのが、シン：お前の本心は本物の世界に戻りたいと思っている　オレからも同じように言ってもらって安心したかった　だからあの時に現れたんだろ：？」

「そしてどうして真面目な性格だと思うかだったな？」

「それは今日お前と会う時間に寸分の狂いもなくちょうどに会いに来たからだ」

「これほど正確に来るのは真面目な奴だろーなって、ただそれだけ何だかな」

「……そうか　流石は理想の僕だね　観察力が鋭いや」

「：やっぱりそうだったのか　ただわからないのは創造世界は何なのか　あれは本当にお前が創造した世界なのか？　理想の世界にしては普通の世界と変わらない世界だったぞ」

「たしかにあれは僕が作った世界だよ　あの世界は君には普通かもしれないけど、僕にとって理想だった世界　普通の学校、普通の会話、普通の日常が僕には理想だった」

「君にもう嘘は通じないだろうから、今度こそ本当の真実を言うよ」
「僕と君は同じ存在で、あの世界に落としたのは僕で、創造世界はもともと僕が住んでいた世界なんだ」

「それとまだ言っていなかったけど創造世界と言うのは実際には理想の世界でずっと生きていけるわけじゃなくて死ぬ前に少しだけ安らぎを与えてくれる場所なんだ」

「あそこは自分の思う理想の世界を作り自分はこれで満足できると思う世界で死ぬか生きるかの人生の選択を一カ月までに考えることができるんだ　だからちょうど夏休みと一緒にだったから季節を夏に選んだんだ」

「だけど僕はそこで迷っていた」

「理想の世界はたしかに良かった」

「でも、本当にこれでいいのか　もしかしたらまだ幸せなことがあるかもしれないって：先が分からないことをずっと考えていたら自分の考えに不安が出てきて君を代わりに選択させようと僕の創造世

界に行かせた」

「僕は臆病で自分に自信が持てなくて、どんなことにも躊躇していた」

「今回も何故だか分からないけど気づいたら人生の選択をさせられて、どうしたらいいの分からなくなった」

「だから誰か僕と同じ答えを言ってくれる人が欲しかったんだ 僕の判断は間違ってた分かったんだ」

「…だけど同じ人間が別々の世界に居ることはできなくて、もし君があの世界に残るのなら僕はそっちの世界では生きて行けず二人とも消滅してしまう だから生きるのなら結局は本物の世界にしか残ることはできなかった」

「でも君はあの世界に残ると言った だから僕らの人生はここまでだね」

「……なら話は簡単じゃねーか オレは本物の世界に戻ってやる」

「え？ だ、だけど…」

「本物の世界に戻ればオレは消えるんだろ？ あの世界だってもうすぐ消えるんだったらどっち道オレは消えちまうがお前は生きられるんだろ？」

「え… うん…」

「ならそれでいいじゃねーか それに消えるつつてもオレはお前なんだ 体は消えても存在は消えたりしないさ」

「で、でも！ 自分勝手に君を作って自分のためだけに存在させたんだよ！ それなのに…」

「お前は本物の世界でまだ幸せがあるかもしれないと思っていたんだろ」

「なら選択は1つだ まだお前の人生を終わらせるわけにはいいかな」

「それに創造世界ですっと生きられないのならなおさらだ オレはもう十分幸せな人生を送れた あいつらと喋ったり、遊んだり、毎日楽しくて楽しくて…だけど気づいたんだ…オレだけ幸せになっ

ても意味がないんだって」

「最初はあの世界にずっといられるならシンも連れていって一緒に笑えたらいいと思っていた けどさっきシンはあの世界にもリミットがあってもう無理なんだと聞いて、オレはちゃんと決意することできたんだ」

「オレはもう心にあふれるほど幸せを貰った：だから次はシンが心からあふれるほど幸せになってほしいんだ」

「……あり……がとう……ありがとう……本当にありがとう」

「感謝される筋合いなんてねーって オレは自分の筋を通したただだからな それに感謝するんだったらお前の友達の志野っちにいいな 今の言葉は志野っちに教えられた言葉だ」

そう、この言葉はキャンプから帰る時に志野っちが

「自分だけ幸せになるなんてダメっすからね」

虫を自由にさせてあげる方が虫にとって幸せにんだと教えてくれたオレはこの言葉をシンにも届けたかった

「あの言葉がなかったらオレはお前のことを思っでやれなかったかもしれない」

「志野っちはオレを変えてくれた大切な友達だ！」

「僕の友達……」

「そうだ、志野っちはオレの大切な友達でお前の大切な友達でもあるんだ」

「……僕も君のように自分だけじゃなく他の人にも思いやれる人間になりたかったよ」

「何言っでんだオレはお前なんだ必ずなれる！ それに人ってもんは変わろうと思えば、何だっで変えることができる 理想から目を離さず真っ直ぐ進んでいけば必ず見つかるはずだ」

「……そうだなオレからも条件を出す」

「条件？」

「ああ、本物の世界にオレを連れて行きたいのなら今から言うことを守ることだ」

「……うん、わかったよ」

「いいか？ 理想ってのは目標なんだ 逃げてるだけじゃ前には進めない お前にはそんな理想があるんだから、それを目標にして自分の足で歩いて自分の手で掴み取れ」

この言葉は辰則が言っていた、

「理想なんて目標みたいなもんだろ？ オレは野球をやっけていつも何か目標を目指してやってる だけどその目標がすぐに手に入ってしまうなんて面白くもなんともないだろ」

この言葉をオレは伝えたかった

「オレは今のお前のような奴と一緒に世界なんて居たくねえ けどなこれから自分の人生を自分で決めて行くのならオレは本物の世界に戻ってやる」

「どうなんだ これはオレが決めることじゃない」

「お前が自分で決めなくちゃならない 自分で答えを出せ」

「僕は……僕は……変わりたい……自分で進めるように変わりたい！」

「それがお前の決断だな」

「リミットまで時間は？」

「あ、あと1分」

「もう一度、選択のチャンスをくれないか」

「うん」

「それじゃ最後にもう一度聞くね 君はどちらの世界に残りたい？」

「オレは……本物の世界に戻る！」

「そうか……なるほどな」

彼は僕を見て何かが分かったかのような表情で小さく声に出していた
「そう言えば、本物の世界に戻るにはお前の名前を知らないといけないんだよな」

「最初お前と会った時、オレが名前を聞き取れないことを不思議に思ってた感じだったがあれば何でだ？ オレを本物の世界に戻す条件なんだからわかってたんじゃねーのか？」

「……実は最初会った時は僕も君と素に戻る方法がわかってなかつ

たんだ」

「僕がまだ創造世界を作っていない時は別の世界に居たんだ　そこは天魔の門て呼ばれてた」

「その場所は死んだ人じゃなく、命に別状はないけど意識が戻らない人が行けるところで、そこで裁判神と言う人によって生死の選択をすることができるといなんだ」

「命があるのに生死の選択をする？　それって意味わかんねーぞ？」

「生きると言った人はその後意識を取り戻し、死を選んだ人は本物の世界で生命維持装置を外し安楽死させられるみたいなんだ」

「どちらも苦痛を伴わないことで生命のバランスを保っているんだってさ」

「だから僕は最初、もう死んでもいいと言ったんだけど、裁判神に創造の力を与えるから、その力で自分の理想の世界に行って本当の思いを考えてくるって言われて…」

「それで創造世界に行ったと？」

「うん　あそこに行って最初、理想の世界は思ってた以上に良かったけど、何もかも自分の世界だと思うと何だか息苦しくて、そこからどうしようかと悩み始めたんだ」

「そこで、裁判神に誰か他の人に決めてほしいと言ったら、創造の力で理想の自分を作って決めさせればいいと言われたんだ」

「続けて裁判神はこう言ったんだ」

「ただし同じ人間が同じ世界で2人も同時に存在できない　主が本物の世界に戻りたいのであればもう一人の自分に素に戻ってもらわなければならない　だがその条件として……」

「僕は最後のほうの話を耳に入れずに言われた通りに君を作り、何も教えないまま創造世界に落とした　たぶん早くこの選択から逃げたかったんだと思う」

「だから最初何で自分の名前が君に聞こえないのかが分からなかった」

「あとで裁判神からちゃんと聞いたら、条件は「もう一人の自分が

本物の名前と作られた自分の存在理由を己で見つけ答える」ことだと聞いたんだ」

「……なるほどな　だから2度目に来た時はいろいろ話してくれたわけか」

「僕も最初はこんなに複雑な事になるとは思ってもみなかった」

「ただ同じ答えを言ってくれるだけ……たっただけの事がギリギリまで決まらなくて……こればかりは理想とはいかないもんだねいや理想じゃなかったからこそ自分が変わったんだろうね」

「理想はたかだか理想　現実を変えたいのであれば自分が変わらなければならぬ」

「その裁判神て奴はそれをお前に分かってほしかったんじゃないか？」

「きつとそうなんだろうね　何も行動せず死を選んだ僕をみて呆れたのかもしれない」

「だけどころとお前は自分で考えて現実の世界を自分で変えようと思えるようになったんだ　そうだろう？」

「新井　真琴^{まこと}」

「え?!」

その時、僕の体が神々しく光った　僕の本当の名前を答えてくれたから本物の世界に戻る条件が揃ったようだ

「これは……!!」

「元気でな真琴　これからはお前の人生はお前が決めるんだ」

「大丈夫だ　人生何が起るかわからねーが、それでも生きてりや楽しいことがあるからな　自分に自信を持て」

「一人じゃ決めれないことの一つや二つあるもんだ　でも恥じることはないオレもいるしな」

「だからさ……人生を楽しめ真琴　今度はお前が心からあふれるほど幸せを手に入れろよ」

「こんなオレにも幸せな人生を送らせてくれてありがとな」

そして、辰則・志野っち・楓・五十嵐……今まで楽しかったよ　お前

たちの事絶対忘れないから…絶対に

「じゃあな…真琴」

「ありがとう…ありがとう…ありがとう…」

別れと感謝の気持ちがかみ上げ泣きながらお礼を言い続けたまま僕の意識は遠のいていった 目の前が見えなくなる直前に、彼は笑顔と共に姿を消して逝った…

「……………くん……………ことくん……………真琴君聞こえる！？ 真琴君！！」

誰かが僕を呼んでいる声がする 誰だろう僕の名前を呼ぶのは……

「せ、先生！ 真琴君が目を覚ましました」

意識がもうろうとする中、慌ただしい声が耳に入ってきた

「よかった意識が戻ったようだね」

眩しい光が目に入ってきた どうやら僕は本物の世界に戻ってきたみたいだ

「もう大丈夫だよ」

病院の先生らしき人からそう言われると、涙とともに無意識に声が出ていた

僕は大丈夫だよ…もう迷わないよ これからの人生を後悔しないように

「ありがとう…龍二」

真実を知った後（後書き）

これにて完結です

最後まで読んでいただきありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7581/>

葉を挟んだ夏の思い出

2010年10月8日15時26分発行